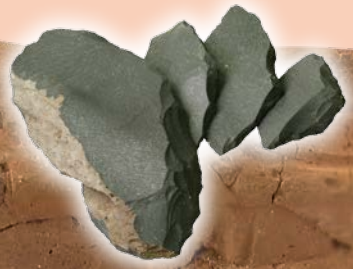
令和2年度出土遺物公開事業

北方交流録

―北とつながる五つの物語―



瀬戸内技法の試作品
（当財団橋本作成）

銛頭（成田市荒海貝塚）

弥生再葬墓の壺（大多喜町船子遺跡）

墨書土器「遠田勲」（匝瑳市平木遺跡）

あごひげの埴輪（千葉市人形塚古墳）

流山市立博物館

流山市加1丁目1225番地の6　☎04-7159-3434

7月18日(土)～8月30日(日)

展示解説会　7月25日(土)・8月8日(土)・8月22日(土)　各回定員10名
午前10時30分、午後2時　※事前申込（7月12日から博物館で電話受付）

芝山町立芝山古墳・はにわ博物館

山武郡芝山町芝山438番地の1　☎0479-77-1828

10月3日(土)～11月29日(日)

展示解説会　10月10日(土)・10月24日(土)・11月21日(土)
午前10時30分、午後2時

千葉県立中央博物館

千葉市中央区青葉町955番地の2　☎043-265-3111

1月9日(土)～2月14日(日)

展示解説会　1月16日(土)・2月6日(土)
午前10時30分、午後1時30分

関連行事

定員50名

講演会

2021
1月31日(日)

会場　千葉県立中央博物館講堂
時間　午前10時30分～午後3時30分

申込　12月1日から電話受付（先着順　平日午前9時～午後5時）
☎043-424-4850　千葉県教育振興財団

ワークショップ

「土器を洗ってみよう」
会場　流山市立博物館
日時　8月5日(水)・8月21日(金)
※詳細は博物館にお問い合わせください。

「ミニチュアはにわづくり」
会場　芝山町立芝山古墳・はにわ博物館
日時　11月8日(日)　午後1時30分～3時30分
※詳細は博物館にお問い合わせください。

※開催館によって、展示資料が異なる場合があります。
※休館日・入館料は各開催館にお問い合わせください。
※今後の新型コロナウィルス感染症拡大の状況によっては、日程等の変更が生じる場合があります。詳しくは当財団または開催館のホームページをご確認ください。

財団HP

[主催]公益財団法人千葉県教育振興財団　[共催]流山市立博物館、芝山町立芝山古墳・はにわ博物館、千葉県立中央博物館　[後援]千葉県教育委員会、流山市教育委員会、芝山町教育委員会
[問い合わせ]公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター　☎043-424-4850　http://www.echiba.org/bunkazai_top.html

ごあいさつ

千葉県は、東京湾と香取の２つの内海、及び太平洋に周囲を囲まれるとともに、内陸は関東各地やその周辺地域につながるという地理的環境のもとで、原始・古代から様々な地域と交流を積み重ねてきたことが、発掘調査の成果から分かってきました。

今回企画した展示は、千葉県を中心に、宮城・福島を主とした南東北地方及び北関東地方の出土品などから文化的・社会的交流の様子を、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の五つの時代を対象に、「北方交流録－北とつながる五つの物語－」と題して、当時の様々な交流を紹介するものです。地理的条件に恵まれた房総と北の地域との交流の歴史を、展示を通して感じていただき、埋蔵文化財の重要性とその保護の大切さを御理解いただければ幸いです。

最後になりましたが、御協力をいただきました関係機関並びに関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

公益財団法人　千葉県教育振興財団

凡例

1．本書は、令和２年度出遺物公開事業「北方交流録－北とつながる五つの物語－」の展示解説図録です。
2．本書掲載の図版は展示資料の一部です。図版の中には、本書紹介のみで、列品されていないものも含まれます。
3．本展示は、文化財センター長 福田誠・調査第二課長 上守秀明の指導のもと、上席文化財主事 栗田則久・文化財主事 服部智至が担当しました。
4．本書の執筆は、第Ⅰ部を上席文化財主事 橋本勝雄、第Ⅱ部を服部智至、第Ⅲ部を主任上席文化財主事 渡邉修一、第Ⅳ部・第Ⅴ部を栗田則久が担当し、編集は栗田・服部が行いました。
5．資料調査に際しましては、上記の担当者以外に、主任上席文化財主事 萩原恭一の協力を得ました。
6．展示資料一覧には、展示番号、資料名、遺跡名、所在県市町村名、資料所蔵者を記載しました。
7．開催館によっては、展示資料一覧に記載した資料の一部が展示されていない場合もあります。
8．本書掲載の図版の提供や出典等については、巻末に記載しました。
9．本展の企画･開催ならびに本書の編集にあたり、多くの方々、教育委員会、博物館等をはじめとする関係諸機関の御指導、御協力を賜りました。ここに御芳名を記し、深く感謝の意を表します。

団 体

我孫子市教育委員会、市川市教育委員会、市原市教育委員会、市原市埋蔵文化財調査センター、いわき市教育委員会、いわき市考古資料館、印西市教育委員会、印西市立印旛歴史民俗資料館、印西市立木下交流の杜歴史資料センター、大網白里市教育委員会、大方鹿島神社、鹿嶋市文化スポーツ振興事業団、木更津市教育委員会、木更津市郷土博物館金のすず、佐倉市教育委員会、芝山町立芝山古墳・はにわ博物館、芝山町教育委員会、市立市川考古博物館、白井市教育委員会、仙台市教育委員会、匝瑳市教育委員会、袖ケ浦市教育委員会、袖ケ浦郷土博物館、市多古町教育委員会、千葉県教育委員会、千葉県立中央博物館、千葉県立房総のむら、千葉市教育委員会、千葉市立加曽利貝塚博物館、千葉市埋蔵文化財調査センター、千葉大学大学院人文科学研究院、銚子市教育委員会、東北歴史博物館、流山市教育委員会、流山市立博物館、成田山霊光館、成田市教育委員会、野田市教育委員会、東松島市教育委員会、松戸市教育委員会、松戸市立博物館、宮城県教育庁文化財課、睦沢町立歴史民俗資料館、八千代市教育委員会、横芝光町教育委員会、横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター、四街道市教育委員会、早稲田大学會津八一記念博物館

個　人

赤塚弘美、浅野健太、阿部昭典、石井友菜、石橋美和子、井出稜、稲木章宏、稲葉昭智、宇井信一、生出美奈、大関枝美子、奥住淳、笠見智慧、大森隆志、加藤正信、加納実、佐藤耕太郎、佐藤憲幸、白根義久、鈴木啓司、高島好一、高野安夫、多賀谷謙豊、武田剛朗、辻史郎、戸谷敦司、戸村勝一郎、西野雅人、西原崇浩、能勢幸枝、久野一郎、松田富美子、松本太郎、道澤明、宮澤久史、元山祐一、矢嶋毅之、山路直充、山口文、山田光洋、米倉貴之

（以上、五十音順、敬称略）

第Ⅰ部　日本列島、北から南から
―技術と使用石材の変化からみた集団の土着化―　旧石器時代

千葉県の旧石器時代の遺跡からは、しばしば東北地方の硬質頁岩(以下「東北頁岩」)を用いた石器が発見されます。これらの東北頁岩製石器は、当時の交流のあかしといえます。これから紹介する北方系細石刃石器群と国府石器群は、まさにその代表格です。特に、千葉県の石器群は質量ともに備わり、全国的に広く知られています。

当時の主要な生活道具である石器が、どのような石材で、どのように作られ、どのように使われたかを考えることは、当時の人々のくらしを解明する上での手がかりになります。石器を研究することの意義はそこにあります。

今回は、このことを念頭に置きながら、北方との密接な交流を物語るこれらの二つの石器群とヒトとのかかわりを展示紹介することによって、旧石器人のくらしぶりに多少なりとも触れていただきたいと思います。

1　北方系細石刃石器群の南下

(1)北方系細石刃石器群とは何か

旧石器時代の終わりに近づくと、旧石器人は、溝を刻んだ動物の骨や角の軸に細石刃を何本も差し込み、松ヤニや天然アスファルトなどで固定して刃物や槍(「植刃器」)として使用するようになりました。細石刃とは、細石刃核から剥がされた小型(長さ３～4cm、幅0.5cm程度)で細長い石のかけらです。植刃器は刃こぼれした細石刃を部分的に交換すれば良く、節約型の石器と言えます。

北方系細石刃石器群(以下「北方系」)とは、このころ登場した細石刃を使用した石器群のうち、北海道方面から本州にもたらされた北回りのものです。湧別技法によって作られた細石刃・細石刃核、荒屋型彫刻刀形石器、角二山型掻器を特徴的に伴います。

ほとんどの石器石材が東北地方に産する硬質頁岩(「東北頁岩」)で、しかも石器が完成品の状態であることから、その大半が東北地方で製作され、人々の南下とともに関東へ運ばれてきたことがわかっています。

湧別技法　この石器群の主な石器である細石刃は湧別技法によって作られています。湧別技法に類似した資料は、中国・シベリアなど東北アジアで広く認められており、当時の日本列島と周辺地域との関連性を考えるうえで重要な手がかりとなっています。その製作工程は以下のとおりです。

①　大型の剥片を素材として楕円形の両面加工石器(母型)を製作する。
②　母型から断面が三角形や台形の削片(スポール)を剥ぎ取り細石刃生産のための打面を作出する。
③　打面の先端に先の尖った鹿角等で圧力を加え細石刃を連続的に生産する。

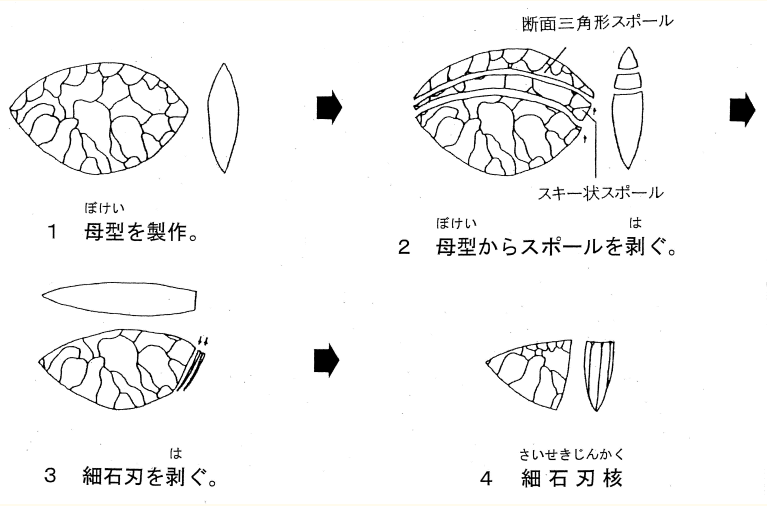


図１　湧別技法

また、この間に生じた剥片は、細石刃以外の荒屋型彫刻刀や角二山型掻器等の別の石器の素材にもなっており、原材料を効率的に活用していることがわかります。

遺跡の分布　現在、関連遺跡は全国で188か所(東北46、北陸29、関東77（北関東32、南関東45)、中部高地19、近畿5、中・四国12)を数え、遺跡分布の南限は、日本海側が山口県宇部市(川津遺跡)、太平洋側は袖ケ浦市(東上泉遺跡)に及んでいます。千葉県では昭和57年に佐倉市木戸場遺跡で初めて発見され、遺跡数は本州最多の30か所を数えます。

生業　北方系の登場には生業が大きく関与している公算が大きいようですが、今のところ分布・立地を主な論拠とした「内水面漁撈説(河川や湖沼等での漁撈)」とシベリアの事例をもとにした「鹿猟説」の二説があり決着がついていません。ただし関連遺跡は、先に述べたように太平

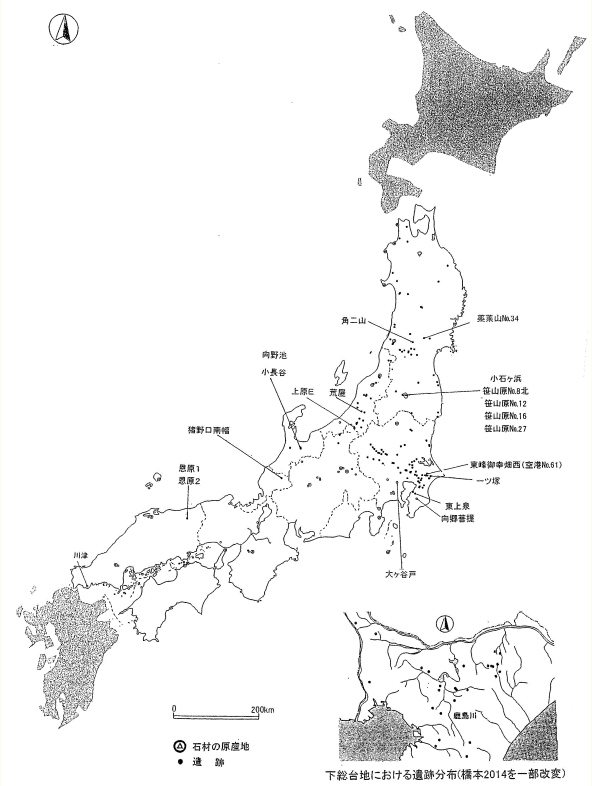


図２　北方系細石刃石器群の全国分布

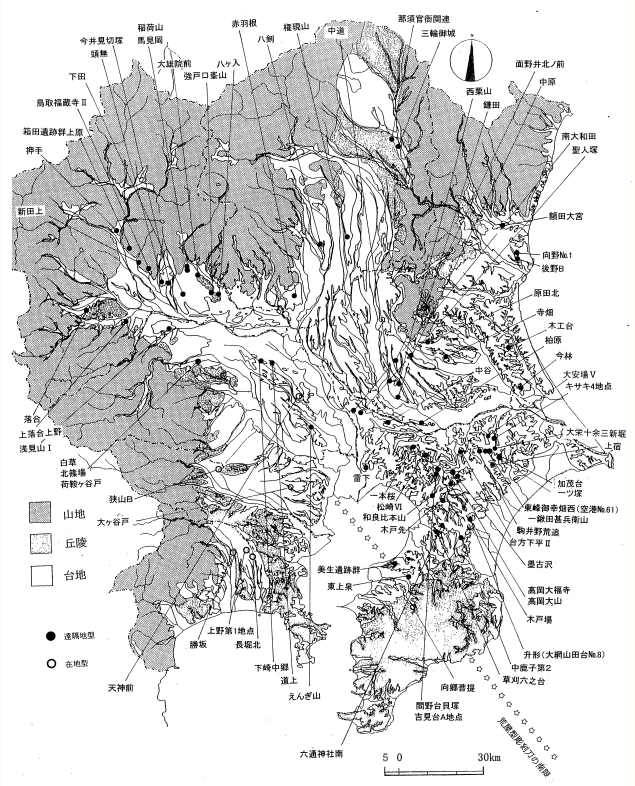


図３　関東の関連遺跡

洋側が古利根川流域(現・荒川低地)、日本海側の中国地方が南限となっており、サケ類(産卵遡河性魚類)の天然遡上の分布と合致することから、前者が有力視されています。

特に、遺跡分布が稠密(ちゅうみつ)な千葉県の下総台地では、関連遺跡が特定の河川の流域に集中することが指摘されており、内陸の印旛沼水系(鹿島川、根木名川)に偏在しています。その傾向は、鹿島川流域で顕著であり、この流域には、佐倉市の木戸場遺跡Ａ地点・高岡遺跡群(高岡大福寺、高岡大山)・間野台貝塚および吉見台Ａ遺跡をはじめ、四街道市の和良比(わらび)遺跡本山第Ⅳ地点・木戸先遺跡、酒々井町の墨古沢遺跡、さらに源流部には大網白里市枡形(ますがた)遺跡と千葉市中(なか)鹿子(かのこ)第２遺跡があり、源流から河口に至るまで、その全域にわたって遺跡が分布しています。このような分布・立地のあり方は、あたかも「内水面漁撈説」を補強しているかのようです。

(２)北方系の南下がもたらしたもの

技術と石材の変化　成田市東峰御幸畑西(とうほう みゆきばた)(空港№61)遺跡では、本来の湧別技法にはない作業面再生剥片のほかに、明確な打面再生剥片と、側面・稜再生とも言うべき細石刃石核の再生(調整)剥片が検出され、そのような再生剥離作業と細石刃剥離作業の繰り返しのために変形(小型化)した細石刃石核が発見されています。類例としては、同じく分布の外縁にある茨城県後野(うしろの)遺跡、千葉県佐倉市木戸場遺跡・香取郡多古町一ツ塚遺跡、及び岡山県苫田郡鏡野町恩原(とまたぐんかがみのちょうおんばら)遺跡の細石刃核があります。概して、旧石器時代の石器には、石材の大きさ、質、量に応じた技術の変容がみられますが、北方系についても東北地方から遠く離れた関東の消費地では、技術の変化と小型化が現象化しています。その背景には、原材料の制約に応じた徹底消費があり、東峰御幸畑西遺跡の事例もその一環といえます。

なお、徹底消費の一環としては、このほかに細石刃核の母型(破損品)からの掻器への転用が窺える袖ケ浦市東上泉遺跡、両面加工石器の破片を細石刃核に再利用した成田市大栄十余三新堀遺跡例があります。

ライフスタイルの変化　北方系集団の暮らしの基本は、生業の季節性(サケ漁)と原産地(関東については東北頁岩)を核とした回帰の二点にほぼ集約されますが、そのためには湧別技法のような効率的で可搬性に富む技術が不可欠でした。むろん、技術面ばかりではなく集団の行動様式も相応に効率的で組織的であったものと考えられます。

おそらく生業のシーズンには、東北から関東に移動し、その途上で在地石材による礫器(れっき)や砥石(といし)を、シーズンオフには、食糧(保存食)を携えて東北方面に帰還し、硬質頁岩の原産地で細石刃や荒屋型彫刻刀･角二山型掻器などを製作･補給し、翌年に備えたのでしょう。このような回帰的なくらしを支えるために相応の行動形態(装備の補給と生業とのリンク)、すなわち、石材産地・中継地・消費地という物流のネットワークの構築の必要性が生じたものと考えら

れます。しかし、時が進むにつれて、回帰からしだいに非回帰(土着化)に転じ、別の生業によるフルシーズンの活動に至ったものと推定されます。

２　国府石器群の北上と南下

(１)国府石器群とは何か

国府石器群とは、瀬戸内技法を背景とした国府型ナイフ形石器を保有する石器群です。年代は後期旧石器時代中葉の姶良Ｔｎ火山灰の降灰(約30,000前)前後で近畿以西の瀬戸内地域にその起源が求められています。

この石器群の標式となっている大阪府藤井寺市国府遺跡の出土資料は国府型ナイフ形石器、翼状剥片、翼状剥片石核など比較的単純な石器組成からなり、石材にはサヌカイトの円礫が用いられています。

瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器　瀬戸内技法は近畿西部・瀬戸内中央部のサヌカイト地帯で発達した組織的な石器製作技術であり、国府石器群に詳しい松藤和人氏によれば、瀬戸内技法には以下の三つの工程があります。

第１工程：翼状剥片石核の素材となる大型剥片を生産する。
第２工程：規格性に富む翼状剥片を生産する。
第３工程：翼状剥片に二次加工を施し国府型ナイフ形石器を製作する。

さて瀬戸内技法には材料のロスが多く生産性が低いという固有のマイナス面があります。一枚の盤状剥片から生産される翼状剥片は数枚といわれており、しかも二次加工の段階で、しばしば破損(垂直割れ)が生じ、最終的に完成に至るものは僅かです。さらに剥片を石核の素材として使用するために大型の原材を必要とします。いきおい瀬戸内技法は安山岩系や下呂石等の、大型石材が潤沢な原産地で発達する傾向にあり、分布域内では、各地で石材の原産地を単位とした集団のネットワークが形成されています。

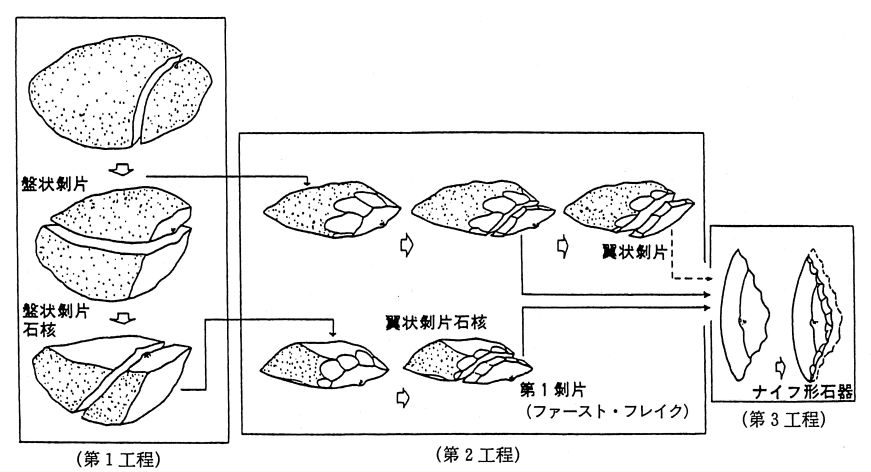


図４　瀬戸内技法

国府石器群の分布　国府石器群の確実な資料は、日本海側では山形県(越中山遺跡Ｋ地点ほか)、太平洋側では静岡県西部(静岡県磐田市匂坂中遺跡群のサヌカイト製翼状剥片石核や広野北遺跡における瀬戸内技法の存在)が遺跡分布の限界といえます。

関東では、主に南関東に遺跡が集中しています。この中で千葉県では、これまでに柏市大松遺跡・原畑遺跡・小山台遺跡、印西市一本桜南遺跡、白井市白井第一遺跡、松戸市彦八山遺跡、船橋市源七山遺跡、千葉市鷲谷津遺跡・椎名崎古墳群Ｂ支群、市原市鶴牧遺跡、我孫子市鹿島前遺跡、印西市油作第２遺跡、山武郡横芝光町西長山野遺跡等の比較的多くの関連遺跡が報告されています。

(２)東北地方からの南下が関東にもたらしたもの

技術特性　瀬戸内技法が石材のロスが大きく大型の盤状剥片を石核の素材とすることから、その実現には原石の相応の大きさと量的保証、及びサヌカイトに似た割れやすさ(剥離特性)が要求されます。

南関東では、このような大型でサヌカイトに似た剥離特性をもつ石材に欠けるために、地域ならではの技術的な変容を遂げており、有底横長剥片を素材として国府型本来のイメージを残しつつ、製作工程よりも結果重視の便宜的な製作技術に変化したといえます。

石材構成　関東の関連資料の石材については 、東北頁岩(硬質頁岩)、玉髄、黒色頁岩、ガラス質黒色安山岩(利根川系等)、黒曜石、チャート、凝灰岩、珪質頁岩、凝灰質頁岩、流紋岩質凝灰岩、流紋岩、白滝頁岩、ホルンフェルス

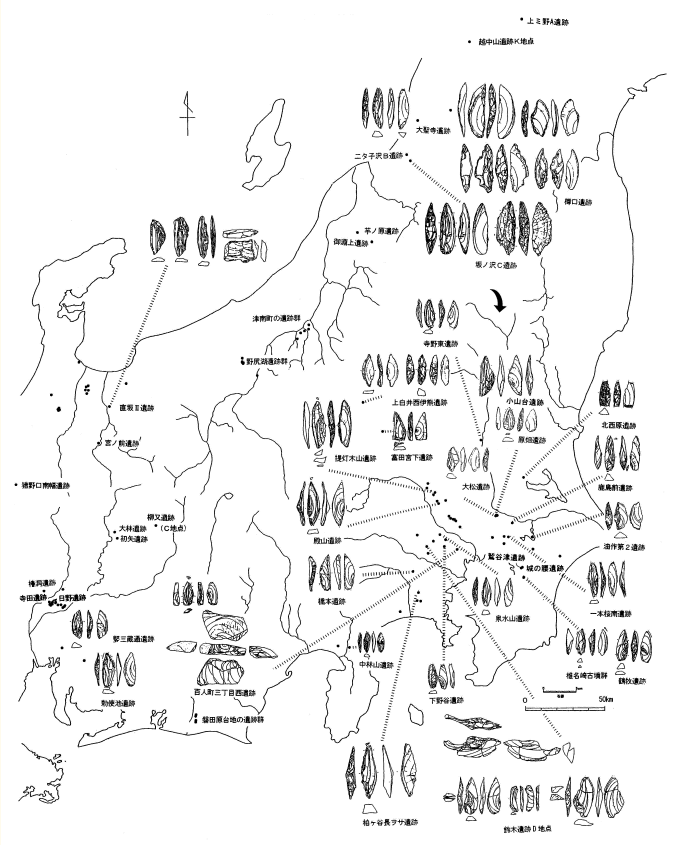


図５　東日本の関連遺跡分布図

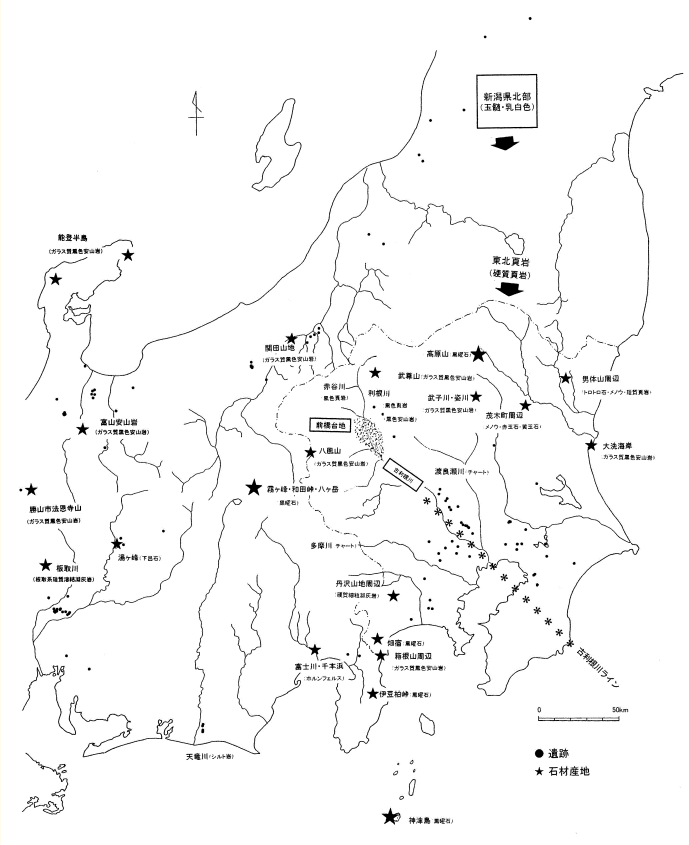


図６　東日本の関連遺跡と石器石材の交流

（計１３種）が報じられています。数量的にはガラス質黒色安山岩、凝灰岩、黒色頁岩、黒曜石が多いようですが、ガラス質黒色安山岩・黒色頁岩は主として群馬・埼玉・東京、古利根川沿い、凝灰岩は相模野台地、黒曜石は大宮台地に遺跡が集中しています。このうち黒曜石については信州系が主体であり、その他の産地については伊豆系が相模野台地や箱根・愛鷹山麓に散見される程度です。全国的には安山岩系との結び付きが強いことが指摘されていますが、どうやら関東は異なるようです。

製品の流入　関東では、相応の石材環境にあった群馬方面では本来の技術が行使され国府型の現地生産に至っています。これに対して南関東の関連資料には、遠隔地石材製の国府型ナイフ形石器の搬入（「外来的性格」）と国府型に類似する製作技術（有底横長剥片製のナイフ形石器の生産）の登場（「内在的性格」）という二つの側面がみられます。

南関東の多様な石器石材の中で外来的な性格を帯びたものとしては、東北頁岩製と乳白色の玉髄製の二種があります。東北頁岩製については、茨城県土浦市北西原遺跡、千葉県柏市大松遺跡・原畑遺跡・小山台遺跡、我孫子市鹿島前遺跡、船橋市源七山遺跡、印西市油作第２遺跡、及び千葉市鷲谷津遺跡・椎名崎古墳群Ｂ支群・城の腰遺跡、玉髄製については埼玉県上尾市殿山遺跡が挙げられます。東北頁岩製については、このほかにも未報告のものがあり、今後も千葉県の北西部を中心として良好な資料の発見が期待できます。

東北頁岩製の製作地については、石材原産地と関連遺跡の分布域を勘案すれば、新潟県北部かもしくは山形県内に所在したことはほぼ確実です。一方、乳白色の玉髄（「半透明の頁岩」）の産地については、野外調査の結果や考古遺物の分布状況から、その産地は、新潟県北部方面が想定されます。また、この付近では東北頁岩と玉髄とのセット関係が現象化しており、先の資料の石材構成との相関性がみられます。以上の新潟県北部の状況に加えて、当時の火山災害（前橋泥流）による群馬方面との断絶、及び古利根川以西に偏る遺跡分布を考慮すると、遠隔地石材による国府系については、新潟県北部から会津方面を経由して関東に製品としてもたらされた可能性が高いものと考えられます。

移動の要因　遺跡の分布や技術の変化から、国府石器群は当初、近畿・瀬戸内方面から日本海に沿って東北地方南部に至り、その後、最終的に関東に伝わり土着化したことが理解できます。旧石器人の移動の要因はさまざまであり、主なものとしては、気候変動（寒冷化）、自然災害（火山災害、地震）、狩猟採集などの生業に伴う（季節的な）移動が想定されますが、残念なことにこの石器群に限っては明確な答えがないのが現状です。謎は深まるばかりです。

第Ⅱ部　漁撈活動にみる地域間交流と地域性

縄文時代における列島規模での地域間交流を示す資料は、これまでの発掘調査により全国各地で数多く見つかっています。例えば、北陸地方の糸魚川周辺を原産地とするヒスイは、東日本全域から出土していることが知られています。ヒスイ製の大珠を出土した県内の最近の事例では、柏市小山台遺跡や横芝光町木戸台遺跡など、特に縄文時代中期の拠点集落と目される大規模な遺跡の例があります。このほかにも、黒曜石や天然アスファルト、南海産の貝類など、原産地が特定の地域に限定される資料が各地で発見されていることから、これらの資源が日本列島のすみずみにまで運ばれ、縄文時代にはすでに複雑な交流網ができあがっていたのではないかとまで考えられるようになってきました。ここでは、このような縄文時代の人々の交流・交易の様相について、漁撈活動という側面から関東・東北地方の貝塚から出土した遺物を取り上げて紹介します。

1　日本列島における縄文貝塚と漁撈文化の多様性

日本列島には北海道から沖縄にいたる全国の沿岸部に多くの貝塚が残されています。日本列島における貝塚の分布状況をみると、東京湾や古鬼怒湾、仙台湾などの内湾を有する東日本、特に太平洋側で貝塚の分布密度が高いことがわかります（図７）。これは、閉鎖性の高い内湾水域やそこに流れ込む河川の河口域では、陸から流入する多量の有機物や栄養塩がたまりやすく、また日本海側と異なり水深が比較的浅いことなども要因となって、人々にとって有用な貝類の生息地となる浅瀬や干潟が発達しやすいため、つまり“潮干狩り”に適した環境が発達しやすいためと考えられます。特に、今回紹介する地域では、東京湾と古鬼怒湾に面する千葉県は約700か所の貝塚を有する全国第１位の貝塚密集地帯、仙台湾に面する宮城県は千葉県・茨城県に次いで第３位の200か所以上の貝塚を有する貝塚密集地帯となっています。

一口に貝塚といっても、その様相は地域や遺跡ごとに特徴があることも強調しておかなければならない重要な点です。図８は、貝塚から出土した主な貝類と貝塚の立地条件の特徴にもとづいて、縄文時代の貝塚を類型化したものです。これに今回紹介する遺跡を当てはめてみると、実にバラエティに富んでいることがわかります。貝類や魚類は地域や立地によって利用しやすいものが異なることから、それぞれが地域固有の漁撈文化を発達させていったのです。

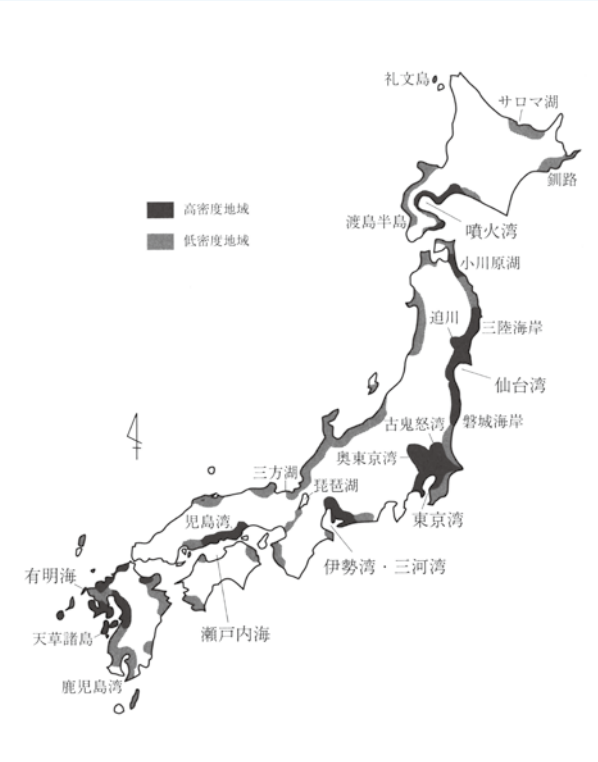


図７　日本列島における縄文貝塚の分布

貝塚の種類		主な貝類	分布	展示遺跡
淡水系貝塚		イシガイ類・タニシなど	主に迫川下流域・三方五湖	－
		セタシジミ	琵琶湖・淀川水系	－
汽水系貝塚		ヤマトシジミ	全国	野田貝塚（野田） 馬場遺跡（印西） 荒海貝塚（成田）
内湾系貝塚	砂質干潟	アサリ	全国（本州以北に多い）	南境貝塚（宮城）
		ハマグリ	主に本州以南（関東以南に多い）	南境貝塚（宮城） 向油田貝塚（香取）
		イボキサゴ	主に東京湾沿岸	加曽利貝塚（千葉） 山野貝塚（袖ケ浦） 永井作貝塚（木更津） 称名寺貝塚（神奈川）
	泥質干潟	マガキ	全国	－
		ハイガイ	主に関東以南	－
外洋系貝塚	砂質海岸	チョウセンハマグリ・ダンベイキサゴ	主に関東	一宮貝塚（一宮） 石神貝塚（茂原） 余山貝塚（銚子）
	岩礁海岸	スガイ・クボガイ類・イガイ類など	全国	鉈切洞窟（館山） 大寺山洞穴（館山） 相子島貝塚（福島） 大畑貝塚（福島）薄磯貝塚（福島）

図８　縄文貝塚の種類と多様性

2　漁撈活動にみる地域間交流

では、地域固有の漁撈文化はそれぞれが完全に孤立して存在したものだったのでしょうか。冒頭で紹介したように、ヒスイや黒曜石、天然アスファルトなど、地域固有の資源を媒介とした“人やモノの交流”は、これまでの発掘調査で出土した遺物から次第に明らかになってきています。一方で、ここで紹介する漁撈に関する“文化や技術”といったものはすべてが形として残るものではありません。モノを対象とする考古学で証明することは簡単なことばかりではありませんが、ここでは、漁撈具のひとつである“銛頭”に焦点をあて、発掘調査で出土した“モノ”から“文化や技術の伝播（漁撈文化の関わり合い）”について探っていきたいと思います。

２つの銛頭文化圏

銛頭（もりがしら）とは、銛（もり）の先端に装着する刺突具のことを指します。銛と同様の構造をもつ漁撈具に“ヤス”と呼ばれるものがありますが、銛とヤスの違いは実のところ明確ではありません。「柄（え）から外れるようになっているものを銛、柄に固定されているものをヤス」とするのが一般的ですが、「大型のものを銛、小型のものをヤス」とすることもあれば、「“逆鉤（あぐ）”の付くものを銛、逆鉤の付かないものをヤス」とする場合もあります。ここでは混乱を避けるため、縄文時代の銛を「柄に装着する刺突具のうち、先端部の銛頭が柄から外れるようになっている漁撈具」のことを指すことにします。

縄文時代の銛頭は、その機能に関わるいくつかの点に注目して分類できます（図９）。１つめのポイントは“柄への装着方法”です。これには２通りあり、銛頭を柄に差し込む“雄形（おすがた）”と、柄を銛頭に差し込む“雌形（めすがた）”に分けられます。２つめのポイントは、“銛縄（もりなわ）の装着方法”です。銛頭には獲物に突き刺さり、柄から外れた後に獲物を手元に引き寄せるための銛縄が装着されています。この銛縄を銛頭に装着する構造の違いから、“索孔（さくこう）”をもつものと“索溝（さくこう）や索肩（さくけん）”をもつものの２通りに分けることができます。以下では、これらの分類を念頭に置いて関東地方と東北地方の縄文貝塚から出土した銛頭をみていきます。

千葉県や神奈川県などの関東地方の貝塚では、縄文時代前期を先駆けとして、鹿の角で作られた“雄形”銛頭が出土します。この伝統は縄文時代中期から後期にも受け継がれ、後期においてその最盛期をみますが、一貫して“索溝や索肩”をもつタイプが盛行することに特徴があります。一方、仙台湾をめぐる東北地方中部の貝塚では、縄文時代中期から後期にかけて、関東地方と同様に鹿の角で作られた“雄形”銛頭が出土し、縄文時代晩期になると雄形銛頭に代わって“雌形”銛頭が発達するようになります。後・晩期を境に雄形から雌形への転換という画期があるものの、東北地方中部でみられる銛頭はいずれも“索孔”をもつタイプであることに特徴があります。

このような銛頭の分布状況から、関東地方には“索溝・索肩銛頭文化圏”、東北地方中部には“索孔銛頭文化圏”と

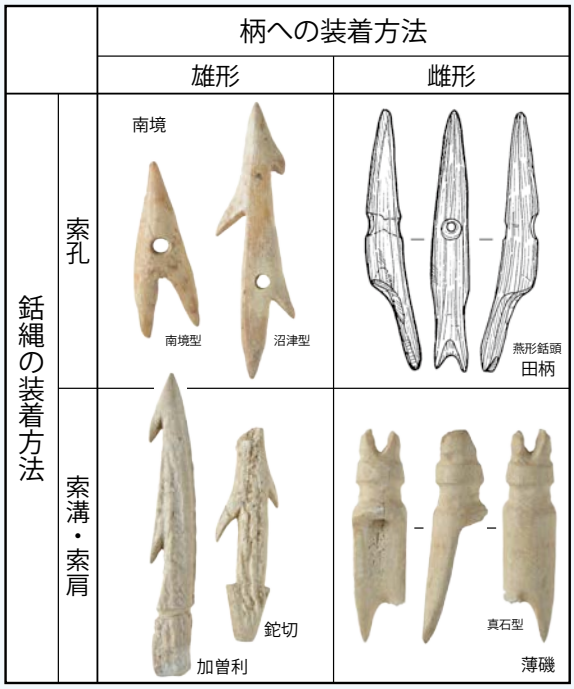


図９　銛頭の分類

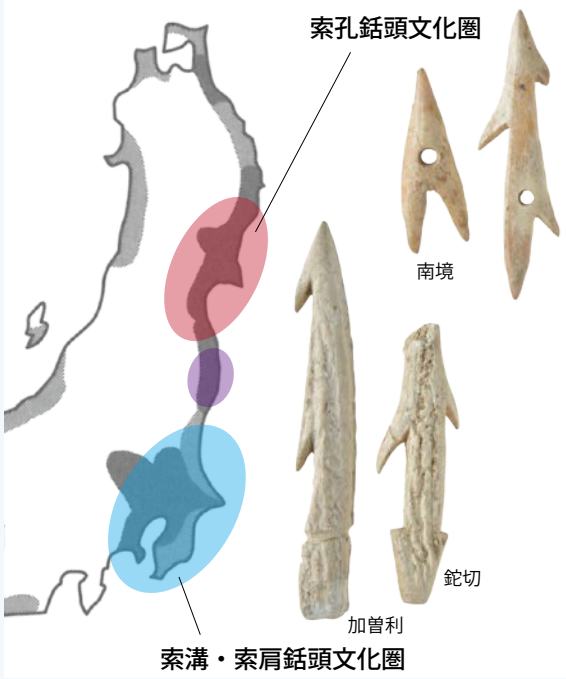


図10　２つの銛頭文化圏

いう、異なる系譜をもつ銛頭を媒介とした２つの文化圏が、対峙するように展開していたと考えられます（図10）。

以下では、これら２つの銛頭文化圏がどのように関わり合っていくのかについて考えていきたいと思いますが、まずは関東地方と東北地方における銛頭の発達過程について個別にみていきます。

関東地方の銛頭

関東地方では、縄文時代前期以降、特に中期後半から後期を中心に、“雄形”で“索溝や索肩”をもつ銛頭が発達することに特徴があります。逆鉤（あぐ）の付き方と銛縄の装着方法に着目して銛頭の発達過程をみていくと、中期には多段の逆鉤が器体の片側に付き、銛縄の装着部には索溝がめぐる例や側面にわずかな抉りを入れる例がみられます。関東地方では「初現段階からすでに逆鉤が複数（多段）であること」がポイントです。後期になると、多段の逆鉤が両側に付くようになり、銛縄の装着方法も索溝に代わって索肩をもつ形に変化していきます。特に索肩の形態が図12のように次第に変化していくことが、神奈川県称名寺貝塚や千葉県館山市鉈切洞穴などの資料から推定されています。後期の中頃になると、これまで東京湾沿岸を中心に発達していた銛頭は、千葉県や茨城県の古鬼怒湾周辺に新たに展開していきます。なかでも現利根川下流域、古鬼怒湾湾口部に位置する銚子市余山貝塚は学史的にも著名な貝塚ですが、関東地方の系譜を引き継ぐと思われる索肩と特徴的な逆鉤をもつ銛頭が多量に出土しています。

図11　関東地方の銛頭

一方で、東京湾沿岸ではこれまで索溝や索肩をもつ銛頭のみであった様相に大きな変化がみられるようになります。それは、東北地方中部と同じ特徴である“索孔”をもつ銛頭の出現です。この索孔をもつ銛頭は、後期の中頃には東京湾沿岸の神奈川県称名寺貝塚や千葉県館山市大寺山洞穴などで特徴的にみられますが、これ以降、資料は少ないものの関東広域に分布を拡大し、後期の終わり頃には伊豆諸島新島などでも見られるようになり、成田市荒海貝塚の例のように晩期にまで継続していきます。

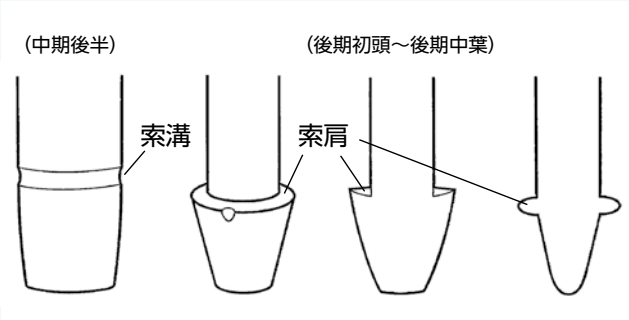


図12　索溝・索肩の変化

東北地方中部の銛頭

東北地方中部の仙台湾をめぐる地域では、中期から後期にかけて「南境型（みなみざかい）」・「沼津型（ぬまづ）」と呼ばれる、“雄形”で“索孔”をもつ銛頭が発達することに特徴があります。縄文時代中期後半から後期前葉にかけて発達した南境型の基本的な形態は図13-1のような石鏃に似た形をしており、以前は「鏃形骨器（ぞくがたこっき）」などとも呼ばれていました。現在では銛頭の１種と考えられるようになり、分岐する片側が柄に装着する基部、もう片側が逆鉤の機能をもっているとされています。基部と逆鉤の判別は比較的たやすく、断面の形が丸いものが基部、角張っているものが逆鉤です。基部が円錐状をしている（断面が丸い）のは、柄からの離脱をなめらかにするためと考えられます。

図13　東北地方中部の銛頭

南境型は「古式離頭銛（こしきりとうもり）」などとも呼ばれ、後期前葉から出現する沼津型の祖形になったと考えられています。ここで、宮城県南境貝塚出土の銛頭をもとに、南境型から沼津型への発達過程をみていくと（図13）、鏃形を呈するもの（1）から、逆鉤が分岐するもの（2）、片側に２本の逆鉤が付くもの（3）、両側に交互に逆鉤が付くもの（4・5）の順に出現することがわかります。初期の南境型からわかるように、東北地方では「初現段階では逆鉤が１つであること」、そして「沼津型へ変化していく過程で逆鉤が多段化していくこと」がポイントです。

晩期になると様相は大きく変化します。南境型や沼津型の雄形の銛頭に代わって、「燕形銛頭（つばめがた）」と呼ばれる雌形の銛頭が盛行します。燕形銛頭とは、「距（きょ）」と呼ばれる器体下部の二股状の突起を燕（つばめ）の尾に、先端を燕（つばめ）のくちばしに例えて

命名されたものです。南境型からの伝統である雄形から雌形の燕形銛頭へと銛頭の主体が移行する点に画期的な特徴がありますが、索孔をもつ点ではいずれも共通しています。

２つの銛頭文化圏の関わり合い

２つの銛頭文化圏における銛頭の発達過程を比べてみると、特に「逆鉤の発達過程」と「銛縄の装着方法」という２つの点においてそれぞれが異なる特徴をもっていると言えます。一方で、関東地方において東北地方の特徴である索孔をもつ銛頭が出現するなど、両文化圏の関わりも見受けられます。

沼津型銛頭の出現の背景　関東地方では中期後半の段階ですでに多段の逆鉤をもつ銛頭が存在するのに対し、東北地方中部では逆鉤を１つだけもつ初期の南境型から、器体の両側に交互に逆鉤が付く沼津型へと次第に変化していきます。このように、関東地方における逆鉤の多段化は、東北地方中部における逆鉤の多段化よりも早い段階に発達していることが指摘できます。そのため、東北地方における沼津型銛頭の出現の背景には、すでに多段の逆鉤を発達させていた関東地方からの影響を垣間見ることができるかもしれないのです。

関東地方における索孔の導入　後期の中頃以降になると、索溝・索肩銛頭文化圏である関東地方でも、館山市大寺山洞穴などで索孔をもつ銛頭が出現するようになります。この索孔の位置に注目すると、一番下の逆鉤の根本、器体の中心軸から逆鉤寄りに少しずれた位置にあることがわかります。関東地方の銛頭だけではこの位置に索孔を設ける理由を説明できませんが、東北地方中部の銛頭をみると南境型以来の伝統であることがわかります。ここで注意してほしい点は、「関東地方で出土した索孔をもつ銛頭は、東北地方中部の沼津型銛頭そのものではない」ということです。というのは、これらの銛頭が関東地方の索肩をもつ銛頭の特徴をも併せもっているためです。銛頭の下端に設けられた平坦面は、関東地方、特に東京湾沿岸の縄文時代後期の銛頭に共通する特徴であり、南境型や沼津型銛頭のような端部が尖る形とは明らかに異なっています（図 14）。さらに興味深いのは、大寺山洞穴出土の銛頭には、索孔だけでなく、関東地方の伝統である索肩も設けられていることです（図 14）。これらの銛頭が意味するところは、“銛頭そのもの”が東北地方から関東地方へもたらされたのではなく、“銛頭に索孔を設ける”という銛縄の装着方法（技術）がもたらされ、この技術を導入した関東地方の縄文人の手によって、これらの銛頭が作られたということです。

図 14　銛頭にみられる技術の違い

２つの銛頭文化圏に挟まれた“いわき地方”の銛頭

２つの銛頭文化圏の“はざま”で独特な発達をみせるのが、東北地方南部の福島県いわき地方の銛頭です。福島県大畑（おおはた）貝塚や相子島（あいこしま）貝塚では、後期前半から中頃にかけて関東地方の系譜を引く雄形で索肩をもつ銛頭が見られます。この時期、関東地方で出土する土器の文様にも、いわき地方と共通する要素が多く見られ、このことからも両地方の関わりが強かったと考えられています。

一方、晩期になると様相は一転します。今度は打って変わって、東北地方中部の銛頭によく似た特徴をもつ「真石（まいし）型」と呼ばれる銛頭が盛行するようになります。「真石型」とは、東北地方中部の燕形銛頭の影響を受けて、いわき地方で特徴的に発達した雌形の銛頭です。さらに興味深いのは、燕形銛頭ときわめてよく似ていますが、索孔をもつ燕形銛頭と異なり、関東地方に系譜を引くと考えられる索溝をもつ点です。この真石型によく表れているように、いわき地方の縄文人は、索孔銛頭文化圏である東北地方中部と索溝・索肩銛頭文化圏である関東地方との“はざま”で揺れ動き、双方の文化や技術を取り入れることにより、独自に改良を加えた銛頭を発達させていったのです。

図 15　山口雷土遺跡の土器

図 16　いわき地方の銛頭

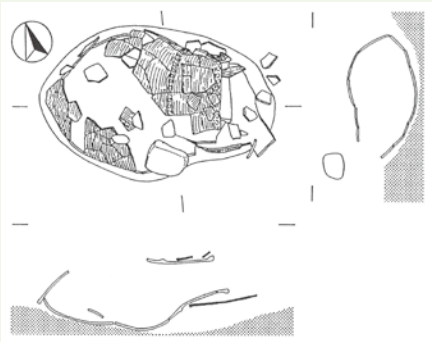
1　弥生再葬墓とは

南東北、関東、中部高地にいたる地域において、弥生時代前期から中期中葉まで盛行する墓制です。洗骨葬あるいは焼骨葬で、大型壺形土器を蔵骨容器として用いるという大きな特徴があります。時期、地域により、単独埋置が一般的な場合もありますが、同一墓坑内に複数の壺形土器が埋置されることが多いのも特徴です。福島県伊達市根古屋遺跡などでは弥生時代開始直前から複数の壺形土器が同一墓坑に埋置されています。房総では、弥生時代前期にさかのぼる弥生再葬墓はまだ発見されていませんが、北関東から南東北に分布する土器の特徴をもつものや、東海から西関東に分布する土器の特徴をもつものまで、房総にはこの時期に地域間交流が活発に行われたことを示す資料が多いことが知られています。

2　弥生再葬墓の成立

(1)東海地方西部における縄文時代晩期から弥生時代前期の土器棺墓

弥生再葬墓の源流のひとつと想定されるのが、東海地方西部における土器棺墓です。縄文時代晩期中葉以降、濃尾平野から渥美半島にかけて、深鉢型土器に人骨を埋葬する習俗が盛行します。土器に成人遺体がそのまま収まらないため、一旦遺体を白骨化させてから再び埋葬(再葬)したと考えられています。晩期終末には大型の広口壺が使われ始め、弥生時代前期に入ると大型壺がその主体となります。土器棺は単独ですが、やや小型の土器で口をふさぐ、あるいは覆うように２個体の土器を「合口」状に使う例も多くみられます。



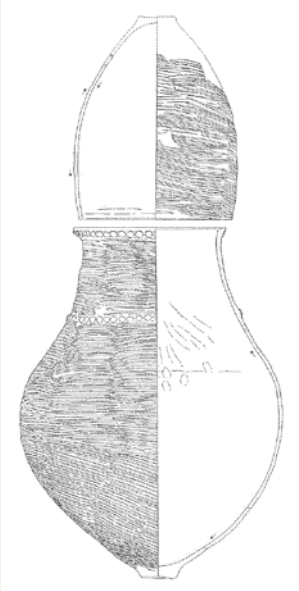


図17　愛知県豊川市麻生田大橋遺跡SZ69と出土土器(土器は1/12)

濃尾平野で水田稲作が成立する頃、当地の最初の弥生土器には、西日本全体で共通性の強い「遠賀川式土器」と在地系の「条痕文系土器」が共存していました。そして、それらの土器が、中部高地や東海東部に移動するようになります。これはすなわち、濃尾平野からより東方に、新しい弥生文化を伝えた人たちが移動した痕跡とみることができます。人々が移動すると同時に、土器棺を使った再葬習俗が中部高地から北関東へ、東海東部から西関東へと伝わっていったのが、東日本の弥生再葬墓の成立要因のひとつです。

(2)東北地方南部における弥生再葬墓の成立

西日本全般で弥生文化が成立すると、いち早く東北地方にもその文化が伝えられた痕跡があることがわかっています。西日本で共通性の強い「遠賀川式土器」によく似た「遠賀川系土器」が、東北地方日本海側を中心に点々と発見され、青森県弘前市の砂沢遺跡では、弥生時代前期の水田跡も発見されました。

その頃、福島県地方では、「遠賀川系土器」や東海の「条痕文系土器」などの外来の初期弥生土器が流入するとともに、伊達市の根古屋遺跡や会津若松市の墓料遺跡で、一つの墓坑に複数の土器棺を埋葬する墓が出現しています。根古屋遺跡で最も古いとされる第３墓坑では、縄文時代晩期終末とされる壺形土器が含まれ、しかもこの時点で、同一墓坑に複数の土器棺を埋置する弥生再葬墓のあり方が完成しているのは驚くべきことです。その理由は明確ではありませんが、この後東日本一帯で盛行する、弥生再葬墓の姿の源流がここに生まれたことは間違いないようです。

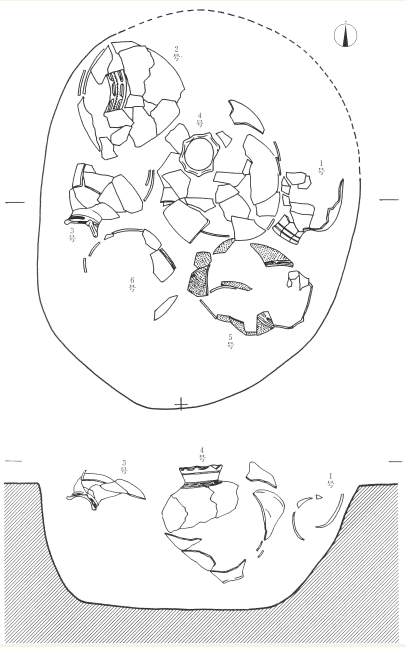


図18　福島県伊達市根古屋遺跡第３墓坑

3　房総最初の弥生再葬墓

（1）房総の縄文時代晩期終末から弥生時代前期

図19　四街道市御山遺跡出土土器

房総では、弥生時代前夜には遺跡数が非常に少なくなり、大規模な遺跡もなく、遺構が伴うことは稀で、比較的小規模な遺物包含層として調査されたものが大半を占めます。多くの遺跡は台地上の少し奥まったところにあり、おそらく焼畑などを生業とし、簡便な住まいを営みながら短期間で移動を繰り返す生活が想定されます。例外なのは、この頃に淡水化していた印旛沼より下流の、汽水域であった旧長沼のまわりに、ヤマトシジミの採集を目的とした集落が営まれ、小規模な貝塚群が集中している成田市東部だけです。

そういった中でも、確実に新しい文化の足音は届いており、たとえば四街道市の御山（おやま）遺跡では、根古屋遺跡の最初の再葬墓と同じ時期の遺物の中に、搬入された東海の初期弥生土器である「樫王（かしおう）式土器」（古い段階の**「条痕文系土器」**）が認められています。弥生時代前期を通して、房総の人々の集落の在り方はほとんど変わりませんでしたが、東海から搬入された初期弥生土器が複数の遺跡で出土しており、継続的に新しい文化の影響は及んでいました。そして、次の段階で大きな画期を迎えます。

（2）千葉市南屋敷（みなみやしき）遺跡

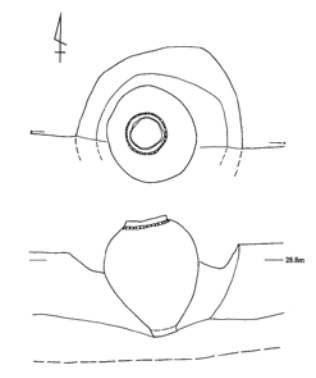


図20　千葉市南屋敷遺跡の弥生再葬墓と出土土器

弥生時代中期初頭、ようやく房総でも弥生再葬墓が営まれるようになりました。千葉市若葉区南屋敷遺跡は、千葉市動物公園の近隣で調査された遺跡で、中世の遺構が密集していたため、弥生時代の遺構・遺物は断片的にしか残っていませんでしたが、弥生再葬墓１基が検出されました。土器棺は単体で、頸部から上を欠損していますが、短頸、長胴の壺形土器です。胴部は条痕で覆われ、頸胴界には刻目を連続させた突帯が、最大径付近に綾杉状の沈線文様が巡ります。このような器形の壺形土器は、弥生時代前期後半の荒海（あらみ）３式の段階に登場し、前期末から中期初頭には少し装飾的要素も加え、茨城県から千葉県北部にかけての弥生土器の主体的な存在になります。

（3）多古町塙台（はなわだい）遺跡BSE－６

図21　多古町塙台遺跡の弥生再葬墓BSE－６

平成12（2000）年から16（2004）年にかけて、香取郡多古町島の独立台地上で調査された遺跡で、関東地方でも最大級の群集規模をもつ64基もの弥生再葬墓群が調査されています。また、群集規模が大きいだけではなく、先述の千葉市南屋敷遺跡と同じ頃、弥生時代中期初頭から始まって弥生時代中期中葉までの比較的長い期間、弥生再葬墓が営まれ続けました。この遺跡の発見以前には、千葉県内で長期間存続した弥生再葬墓群が知られていなかったため、その意味でも大変注目されました。

塙台遺跡の中でも年代の古い弥生再葬墓の一つであるBSE－６には、計５個体の壺棺が埋置されていました。図21に見られるように墓坑はほぼ円形で、３個体の壺形土器が寄り添うように埋められ、他の２個体はそれぞれ離れて埋められています。互いにもたれかかるように出土した３個体（図22後列）は東関東在地の土器で、離れていた２個体の一つ（図22前列左）は東海地方からの搬入品、もう一つ（図22前列右）は明確に西関東の特徴をもつものでした。これらはいずれも弥生時代中期初頭の特徴をもつ土器です。この弥生再葬墓は、房総における弥生再葬墓の初現期の遺構であるばかりでなく、そこには３つの地域の土器が共存し、墓坑内の配置も３つに分かれるという象徴的な遺構ということができます。

図22　塙台遺跡BSE－６出土土器　千葉県指定有形文化財

4　人々が土器を携えて 西から北からやってきた

（1）横芝光町長倉宮ノ前遺跡

先に見た、房総で最も古い弥生再葬墓の一つである塙台遺跡BSE－６の場合、複数の壺棺を埋置するという南東北で最初に完成された姿で登場し、すでに他地域で流行していた習俗が持ち込まれた形になっています。しかも、そこにはすでに弥生文化が定着していた東海や西関東の人々も関与した可能性が大きいということになります。塙台遺跡とは栗山川を挟んで対岸に位置する、弥生時代前期末から中期初頭の集落跡と考えられる横芝光町長倉宮ノ前遺跡では、在地系の弥生土器に東海系弥生土器及び西関東系弥生土器合わせて10個体近くが共存していました。初期の弥生時代集落の形成に当たって、静岡、神奈川方面などからやってきた人々が弥生文化の情報をもたらしたといえるでしょう。

図23　横芝光町長倉宮ノ前遺跡出土外来系土器

（2）多古町塙台遺跡BSE－３

塙台遺跡で、BSE－６の次の時期に位置づけられる弥生再葬墓の一つにBSE－３があります。ここでは、在地系の短頸、長胴の壺形土器２個体と北関東系の壺形土器及び鉢形土器それぞれ１個体が出土しました。在地系の壺形土器は、弥生時代前期以来の器形を継承し、胴部には条痕を、口縁部を複合口縁として縄文を施しています。図24の左の土器が北関東系の壺で、胴部上半に磨消縄文による渦巻文を配し、その部分を赤彩しています。このタイプの文様をもつ土器は栃木県から茨城県北部に分布の中心があり、狢Ⅰ式と呼ばれますが、この土器はそれらの中でも頸部が短く、最大径が胴部のかなり上方にあることから古相を示すものといえます。また、図24手前左の鉢形土器は、縄文時代晩期の工字文を淵源として、そこから変化した磨消縄文をもち、南東北、新潟、北関東で弥生時代中期前葉に位置づけられるものといえます。BSE－６では西から来た土器が在地の土器と共存したのに対し、BSE－３では北から来た土器が在地の土器と共存していました。

図24　塙台遺跡BSE－３出土土器　千葉県指定有形文化財

（3）市原市武士遺跡の弥生再葬墓

市原市の武士遺跡は、旧石器、縄文、弥生、奈良・平安各時代の遺構、遺物が数多く調査された遺跡ですが、弥生時代の再葬墓群、集落跡としてもよく知られています。明確な弥生再葬墓は、計５基が調査され、図25にみるように遺跡の西寄りに２基、東寄りに３基がかなり距離を置いて検出されました。西群のSX-001は、当初１基の弥生再葬墓として調査が開始されましたが、南北２基の墓坑が接するように営まれたと判断されます。これらの墓坑から出土した壺形土器は、いずれも弥生時代中期中葉の、出流原式とよばれる在地の土器で構成されています。

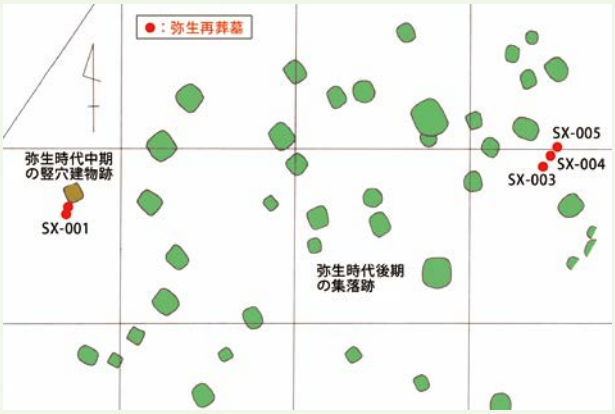


図25　武士遺跡弥生時代遺構分布図（部分）

一方、東群の３基の弥生再葬墓から出土したと土器は、いずれの墓坑にも、西関東系の平沢型または平

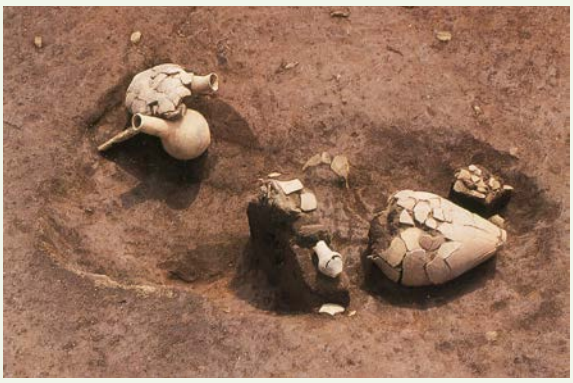


図26　武士遺跡 SX-001（右：北墓坑、左：南墓坑）

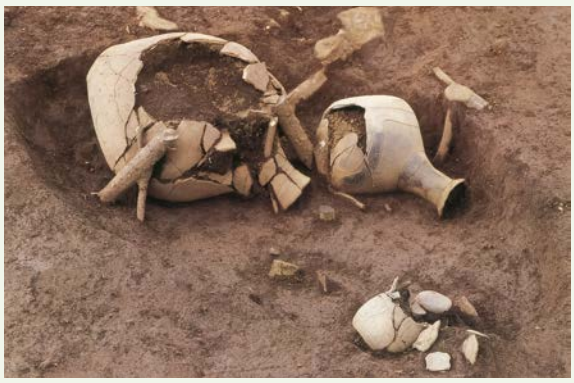


図27　武士遺跡 SX-005

沢式とよばれるタイプの弥生時代中期中葉の壺形土器が使われていました。中でもSX-005には、平沢型の大型壺に、塙台遺跡BSE－３にもみられた狢式あるいは野沢Ⅱ式系統の渦巻文をもつ壺形土器が共伴していました。さらにSX-005には、磨消縄文系の王字文をもつ小型鉢形土器も伴っています。なお、武士遺跡出土の狢式系の土器にはカナムグラという植物の茎を回転させる「擬縄文（ぎじょうもん）」が使われていますが、このカナムグラによる擬縄文の分布も南東北から東関東とされています。

図28　武士遺跡SX-005出土土器

武士遺跡で検出された５基の弥生再葬墓は、東西に大きく分布が分かれていました。一方は在地の土器だけで構成され、他方は外来系の土器だけで構成されており、しかも外来系土器で構成される東群には、西関東系と北関東系という出自の異なる土器が共存していたのです。

図29　船子遺跡出土土器

（４）大多喜町船子（ふなこ）遺跡の弥生再葬墓

船子遺跡の弥生再葬墓とされるものは、旧大多喜女子高校校庭の土取り工事中に発見されたため遺構が明確になっていませんが、石で囲まれて４個体の土器が出土したと報告され、現在３個体の土器が千葉県教育委員会に保管されています。それらが１つの墓坑に埋置されたかどうか必ずしも明確ではありませんが、３個体のうち２個体は、三角連繋文や山形文、円形文などと刺突文の組み合わせで、在地の弥生時代中期中葉・出流原式に比定されます。もう１個体は、磨消縄文の手法で渦巻文を描く狢式系の壺形土器です。これらが共伴したとすれば、船子遺跡では、地元の被葬者と北関東に出自をもつ被葬者が同一墓坑内で同居していたことになります。

（５）弥生再葬墓にみる地域間交流

房総で弥生再葬墓が営まれた弥生時代中期初頭から中期中葉まで、多くの遺跡で複数の地域の土器が共存する実態が明らかとなっています。このような在り方は、他地域ではあまりみられません。

房総で弥生再葬墓が成立する中期初頭の段階では、多古町塙台遺跡以外のまとまった遺跡がないため塙台遺跡の状況から判断すると、在地系土器に共存する外来系土器は、東海系、西関東系に限られています。これは、弥生文化が成熟しつつあった東海地方からの影響が強く、東海東部や西関東の人々が往来し弥生文化を伝えるメッセンジャーとしての役割を果たしていたと考えることができます。そこに抗争の跡は全くみられず平和的に共存したことは、在地系土器と外来系土器が同一墓坑内に共存することからもうかがえます。ただ、墓坑内の配置からは、共同体内の血縁的秩序を維持するためか、在来の人々と外来の人々の区分は意識されていたと思われます。

次の段階、弥生時代中期前葉から中葉にかけては、東海地方からの直接の搬入土器はなくなりますが、西関東系土器と北関東系土器がほぼ同等にもたらされるようになります。房総という地域の立地は、東海筋の海上ルートを通じて東海地方や相模湾沿岸とつながり、旧利根川水系を通じて中部高地や上野・北武蔵地方とつながり、鬼怒川水系を通じて下野・常陸地方とつながっていました。各地方からみると、房総という地は交通路の行き着く先であり、房総からみると放射状に各地方とつながっていることになります。縄文時代以前にも類似したことは起きているのでしょうが、弥生時代中期になって関東各地を結ぶ地域間交流ルートが確立したのではないかとも思えてきます。そして房総は、それぞれの終着点であり、結果的に中継点でもあった可能性もあると考えられます。

弥生時代中期中葉の弥生再葬墓では、同一墓坑内に系統の異なる土器が共存する場合もあれば、武士遺跡のように墓域を区分している場合もあります。その武士遺跡でも在地系土器をもつ被葬者は区別されていても、北関東系土器と西関東系土器は同一墓坑で共存しています。血縁の結びつきが強く、異なる出自の人々は集落内で区別されていたことが多い縄文時代の共同体から、共同体内に地縁関係が持ち込まれる弥生時代以降の社会へ、弥生再葬墓の成立期というのは、その端境期（はざかい）であったのかもしれません。

第Ⅳ部　房総から南東北へ―人とモノの移動―

南東北の古墳時代前期の集落や墓の中には、東海や関東地方からもたらされたと思われる土器や方形周溝墓などが確認されていますが、具体的な内容については明らかとなっていません。関東地方から南東北への人やモノの移動が顕著に現れてくるのは、古墳時代後期の６世紀後半以降になってからです。中央政権が東北地方をその支配領域に組み込むための政治的・軍事的拠点として７世紀後半代に設置された城柵（じょうさく）の造営に際して、関東地方からの移民が大きく関与していたとされています。一方、６世紀後半以降、関東に出自が求められる土師器が、福島県や宮城県・岩手県などの太平洋沿岸の拠点的な集落に多く出土しており、城柵以前の段階に関東地方からの人とモノの移動があったことを示しています。

ここでは、遺跡から出土した土器や古墳の副葬品、埴輪などの遺物及び特異な形態の「高壇式横穴（こうだんしき）」について紹介し、千葉県及びその周辺地域から宮城県・福島県への人とモノの移動について考えてみます。

関東系土師器

関東地方から東北地方への移動を示す資料として代表されるのが、「関東系土師器（はじき）」と呼ばれる土器です。仙台市栗（くり）遺跡を標識遺跡とする在地の「栗囲（くりがこい）式土器」とは器形や製作技法が異なり、関東地方の特徴を持っています。時期的には、古墳時代後期から奈良時代前半の６世紀末頃から８世紀中頃まで確認され、出土する土器は、食膳具となる杯がほとんどです。関東系土師器は仙台平野を中心に分布し、６世紀末から７世紀前半頃までは、茨城県南部から千葉県北部の霞ヶ浦水系沿岸地域に展開する土師器杯の影響が想定され、７世紀後半以降は、埼玉県北部から群馬県南部を中心とする地域を出自とするようになります。

図30 栗囲式土器
（仙台市郡山遺跡）

栗囲式土器の杯は丸底で、口縁部と体部の境に段を形成し、長い口縁部が外側に広がる形が基本で、内面に炭素吸着による黒色処理が施される特徴を持っています。一方、霞ヶ浦水系沿岸地域の杯は、口縁部が内傾する須恵器（すえき）の杯身を模倣したものや口縁部が短く立ち上がるものが一般的で、内面に漆塗りによる黒色処理を加える特徴があります。市川市鬼高（おにたか）遺跡を標式遺跡とする「鬼高式土器」の特徴を持っていることから、東北で出土する霞ヶ浦水系沿岸地域の関東系土師器杯は「鬼高系杯」とも呼ばれています。このような「関東系」・「鬼高系」の土器は、搬入品ではなく、現地で生産されたものがほとんどであると考えられています。関東地方から東北地方への移住民の中に、土師器作りの技術者が含まれていたことが想定されます。

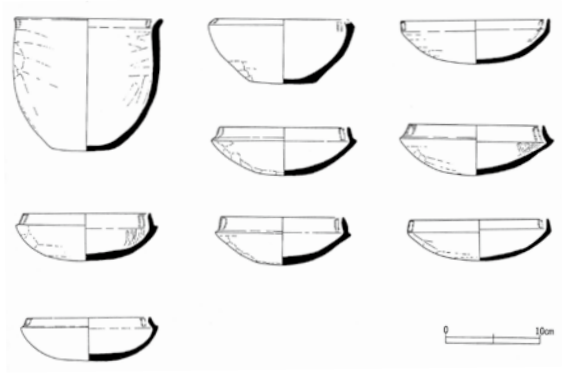


図31 鬼高式土器（鹿嶋市厨台遺跡）

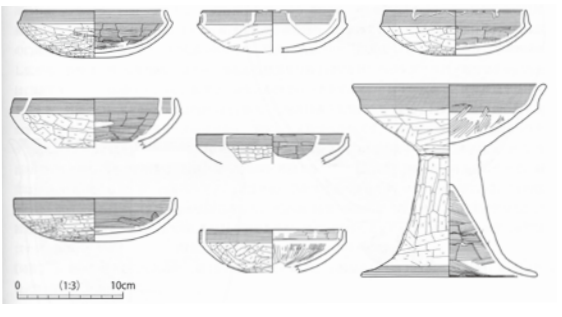


図32 鬼高系土器（仙台市西台畑遺跡）

人やモノの移動を考える上でよく取り上げられるのが、７世紀半ば以降、東北各地に設置された政治的・軍事的拠点となる「城柵」です。太平洋岸の「陸奥国（むつ）」の城柵の造営には坂東（ばんどう）八カ国（安房・上総・下総・武蔵・相模・常陸・上野・下野）が関わり、その運営などに大きな役割を果たしたのが「柵戸（さくこ）」と呼ばれた東国からの移住民でした。『続日本紀（しょくにほんぎ）』などの坂東に関する柵戸の記事によると、霊亀（れいき）元（715）年５月の上総など坂東六カ国の富民千戸の陸奥国への移住から、延暦二十一（802）年の上総・下総などの浪人４千人の陸奥国胆沢（いさわ）城への移住まで、断続的な人の移動が確認されます。

図33 鬼高系土器
（仙台市郡山遺跡）

初期城柵として知られる仙台市郡山遺跡では、７世紀中頃～末葉のⅠ期官衙以前の６世紀末頃から始まる集落が確認されており、その中に霞ヶ浦水系沿岸地域の鬼高系土師器が含まれています。史料上の「柵戸」の移住開始前から、主に霞ヶ浦沿岸地域の土器が太平洋岸の仙台平野を中心とした地域で使用されていたことが想定され、政治的な意図とは異なった地域間の集団的な移動・移住のネットワークが存在していたようです。

2円(方)窓鍔付き直刀

鍔の背側に円形あるいは方形の２つの孔が開けられたきわめて特徴的な直刀で、６世紀後半～７世紀後半の古墳や横穴の副葬品として出土しています。古墳時代の直刀の鍔は、一般的には６個や８個の窓が開けられ、装飾的な意味合いを持っていますが、ここで取り上げる２円(方)窓は、２つの孔に紐を通して手首などに巻いて落下を防ぐ手貫緒のような実用的な役割を果たしていたものと思われます。

関東地方を中心に、東北地方南部に及ぶ分布を示し、特に千葉県に集中しています。その内訳は、千葉県で12点、東京都で３点、神奈川県・埼玉県・群馬県・栃木県で各１点、福島県で２点、宮城県で３点確認されています。時期的に見ると、香取市(旧栗源町)台の内古墳と山武市(旧山武町)胡摩手台16号墳の２例が６世紀後半～末葉と最も古く、下総東部が故地となる可能性が高いと思われます。一方、東北地方では、福島県いわき市小申田横穴群北18号横穴の例が６世紀末～７世紀初頭と考えられ、房総の太平洋岸地域から福島県、さらには宮城県へとそれほど時期を隔てることなく流通していったようです。

山武市胡摩手台16号墳

千葉市六通金山1号墳

いわき市小申田横穴群北18号横穴

図35 二円(方)窓鍔

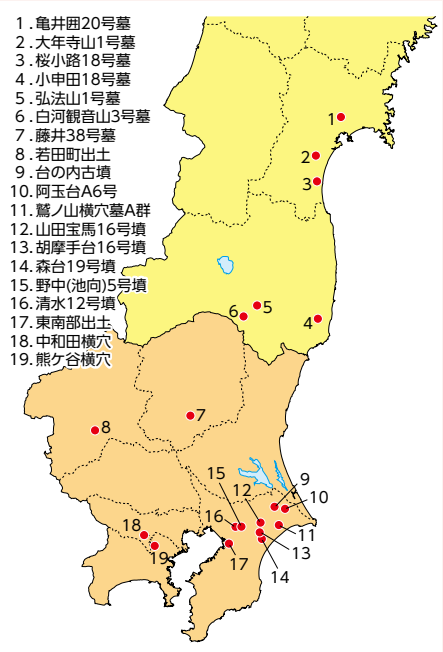


図34 二円(方)窓鍔付き直刀の分布

小申田横穴群最古の北18号横穴では、金銅装の飾弓など豊富な副葬品が出土しています。また、６世紀末頃に築造が開始される宮城県仙台市大年寺山横穴群には、金銅装大刀や馬具などの副葬品を有した身分の高い被葬者が埋葬されており、付近に所在する陸奥国の城柵である郡山遺跡に関わりのある人々の墓と考えられています。胡摩手台16号墳が武射国の最後の首長墓と位置づけされていることから考えて、首長間での交流を伺わせる資料として注目されます。

あごひげの人物埴輪

埴輪は古墳時代を代表する遺物で、関東地方では、古墳時代後期に埴輪を古墳に樹立することが盛んとなります。房総のこの時期の埴輪は、北総地域に広く分布する「下総型埴輪」と、山武郡北部を分布の中心とする「山武型埴輪」に代表されます。人物埴輪に注目すると、下総型は腕が短く、扁平な顔面をもつ上半身を表現するのに対し、山武型は全身を表現し、立体的な顔をもつというように、大きな違いがあります。

北との交流が想定される埴輪として、山武型に含まれる「髭の武人」とも呼ばれる人物埴輪があげられます。顎髭を伴う逆三角形の顔、Ｔ字形につながる眉と鼻、高い山高帽風の三角冠、束ねた髪を紐で縛るような表現をしたＬ字形の下げ美豆良など、独特の特徴があります。

千葉県内の顎髭の人物埴輪は、横芝光町殿塚古墳・姫塚古墳、山武市経僧塚古墳、千葉市人形塚古墳から出土しています。この他にも、山武市朝日の岡古墳と西ノ台古墳でも確認されているようですが、はっきりしていません。横芝光町から山武市にかけて分布する古墳は、いずれも九十九里沿岸の大型前方後円墳で、それまで有力な古墳がなかった地域に突如として殿塚古墳(６世紀後半)が出現し、その後間断なく大型古墳が築造される特徴を持っています。

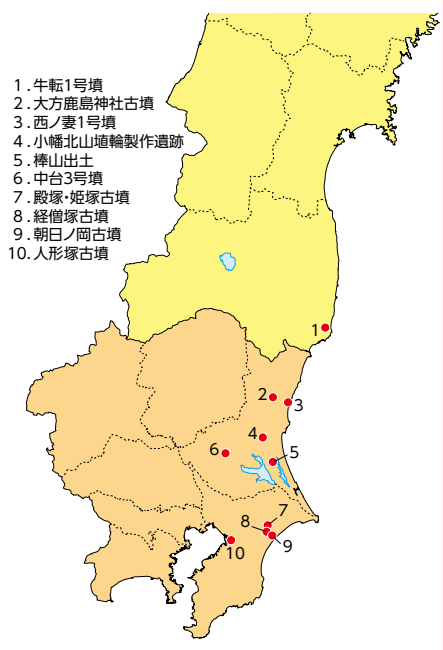


図36 顎髭人物埴輪の分布

九十九里から離れた東京湾岸に位置する千葉市人形塚古墳は、殿塚古墳と同様に特徴的な長方形の周溝、経僧塚古墳と類似した石室を有するなど、古墳築造に際して九十九里沿岸の影響がきわめて強かったようです。この中で、顎髭

の埴輪も人形塚古墳に供給されたのでしょう。この分布・位置関係は先に紹介した2円(方)窓付き直刀と共通しており、注目されます。千葉市人形塚古墳から出土した5体の武人埴輪の顎髭は、短く、浮き上がるようなタイプと、長く伸びて胸に貼り付くタイプに分かれます。前者が3体、後者が2体で、腰帯の有無や大刀の付け方の違いなどそれぞれのタイプで共通する表現方法が採られています。また、頭部が丁寧な作りから簡略化していく傾向が見られることから、前者から後者へと時期的に変化していく可能性も指摘されています。

顎髭埴輪の分布の中心は茨城県にあります。明確な資料としては、潮来市棒塚(ぼうづか)2号墳、つくば市中台2号墳、東茨城郡茨城町小幡北山(おばたきたやま)埴輪製作遺跡、日立市西の妻1号墳、常陸太田市大方(おおかた)鹿島神社古墳があげられます。その他に、遺跡が特定されない伝茨城県内出土とされる埴輪がいくつか存在しています。東北地方では、現在のところいわき市牛転(うしころばし)1号墳のみで確認されています。

顎髭の埴輪がどこで生産されて広がっていったのかについてはよく分かっていませんが、殿塚古墳や姫塚古墳の埴輪の胎土に雲母が含まれている例があり、筑波山周辺で生産され、九十九里沿岸にもたらされた可能性が考えられています。また、牛転1号墳採集の顎髭の人物埴輪の頭部は、顎髭はほとんど欠落していますが、つながった眉と鼻の造作や貼り付けの可能性が高い顎髭などは顎髭埴輪に共通する特徴を持っています。ただ、頭部に鉢巻状の粘土板が巻かれており、房総の埴輪とは様相が異なっている点もあります。牛転1号墳例とよく似ているものが、常陸太田市大方鹿島神社古墳の埴輪です。ただ、頭頂部の造作は異なり、大方例は小さな円孔が開けられ、他の埴輪には見られないのに対し、牛転例は三角冠状です。

図37 顎髭人物埴輪
(千葉市人形塚古墳)

このような状況から、顎髭の埴輪は主に茨城県で生産され、筑波山周辺の南部地域から房総の太平洋岸、北部地域から福島県いわき市へと分布を広げていった可能性が考えられます。

図38 顎髭人物埴輪頭部
(常陸太田市大方鹿島神社古墳)

図39 顎髭人物埴輪頭部
(いわき市牛転1号墳)

高壇式横穴

横穴は、崖の斜面に穴を横に掘り込んで造った墓で、主に古墳時代後期～終末期に集中し、九州から東北まで広く分布しています。横穴の形状は古墳の横穴式石室に類似し、遺体を置く部屋を玄室(げんしつ)、そこに入るための通路を羨道(せんどう)と呼んでいます。その形状は地域ごとにそれぞれ特徴がありますが、主に西日本の横穴の影響を受けた横穴が東日本に展開していくと考えられています。

千葉県の横穴は4,500基ほど確認されており、全国的に見ても密集地域と言うことができます。また、県内の分布状況から、東京湾沿岸の西上総地域、太平洋沿岸の東上総地域、南端の安房地域、北側の利根川下流域の4つの地域に大きく分けることができ、地域ごとに特徴的な形態の横穴が見られます。県内の横穴の出現は6世紀後半で、畿内(きない)の河内地方の横穴を変容させた東海地域の横穴構造が伝わってきたと考えられています。その後は、山陰の出雲地方や九州の肥後(ひご)地域などの影響を受けた横穴が県内に展

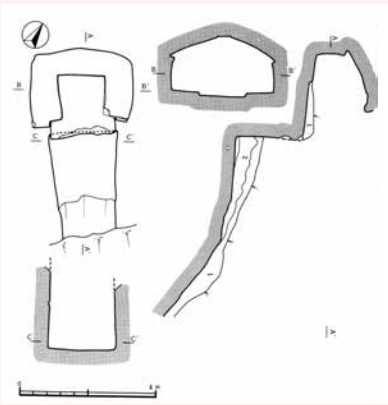


図40 高壇式横穴(茂原市山崎横穴群29号横穴)

開するようになります。その中に、羨道部の底面より１ｍほど高い位置に玄室の底面が設けられる「高壇式横穴」と呼ばれる特異な形状を示す横穴が確認されます。このタイプの横穴は、６世紀末葉～７世紀初頭に西上総地域で姿を現しますが、その後は東上総地域に広がって定着し、「長生型」とも呼ばれています。匝瑳地域の鷲ノ山横穴群に代表される横穴は、高壇式となってはいるものの、棺台の作り方などは肥後地域の影響を受けた東北地方の横穴との関連が指摘される利根川下流域と類似しています。南側に位置する東上総地域の高壇式と、北側の利根川下流域の構造を折衷した構造の横穴が展開する地域です。このタイプの横穴は、茨城県の霞ヶ浦北岸に所在するかすみがうら市崎浜横穴群と志戸崎横穴群にも見られます。霞ヶ浦を介在して匝瑳地域の横穴がもたらされた例と考えられます。

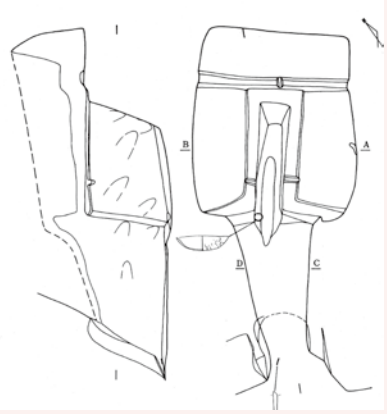


図41 高壇式横穴（匝瑳市鷲ノ山横穴墓Ａ群11号横穴墓）

図42 高壇式横穴
（かすみがうら市崎浜横穴群）

東北では、宮城県の海岸部に面する東松島市矢本横穴群のみに高壇式横穴が営まれています。これまで総数107基の横穴が確認され、65基が調査されています。高壇式横穴は65基中９基で、その出現時期は７世紀中葉頃と想定され、矢本横穴群開始当初から高壇式横穴が築かれていたようです。ただ、房総の高壇式は、玄室に２あるいは３つの棺台が配置される特徴があり、矢本横穴群の玄室とは異なった構造です。また、高壇の高さも千葉県より低いものとなっています。矢本横穴群の高壇式横穴の故地を東上総地域とするには躊躇する部分もありますが、低いとは言え、「高壇」の構造を採り入れたことからは、太平洋岸を中心とした房総との何らかの関係が存在していた可能性が伺われます。

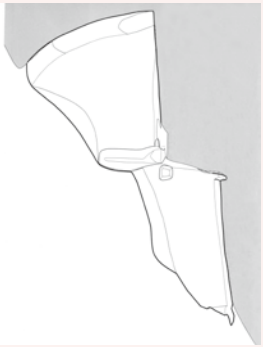


図43 高壇式横穴（東松島市矢本横穴群）

この点で、後に陸奥国の「牡鹿柵」となる東松島市赤井遺跡が注目されます。この遺跡は、７世紀中葉頃から集落が形成され、多くの土器が関東系土師器で占められています。矢本横穴群にも関東系土師器が副葬されるとともに、赤井遺跡で出土した律令官人に関係する「舎人」や「牡舎人」と同様の「大舎人」が出土していることから、矢本横穴群の被葬者は、赤井遺跡の有力氏族や官人層の墓として捉えられています。赤井遺跡の形成には関東の集団移住が考えられ、高壇式横穴の造営から、上総地域の有力者がその中に含まれていたのではないでしょうか。

『続日本紀』神護景雲三（769）年三月条に、「牡鹿郡人外正八位下春日部奥麻呂等三人武射臣」とあり、陸奥国の大国造道嶋宿禰嶋足の申請によって牡鹿郡の郡領クラスの在地有力者である春日部奥麻呂等が武射臣という姓を賜ったことを示しています。この「武射」は、九十九里沿岸に位置する古代の上総国武射郡を指していることはほぼ間違いなく、春日部奥麻呂は、出身地である九十九里から海をわたって牡鹿地域に移住し、大きな勢力を有していったものと考えられます。その移住時期は７世紀中葉以前であった可能性もあり、関東系土師器や高壇式横穴が存在する背景には、このような有力者の移住が行われていたのでしょう。

第Ⅴ部　俘囚の移配と集落―東北から房総へ―　奈良・平安時代

日本の古代国家にとって、統治の及ばない東北北部の蝦夷の支配が重要な課題となっていました。その中で、宝亀五(774)年の蝦夷による桃生城襲撃事件以降、弘仁二(811)年まで断続的に行われた「征夷」、いわゆる「東北38年戦争」によって陸奥や出羽の多くの蝦夷が捕虜や投降者となり、彼らを「俘囚」として関東以西の地に移住させる「移配」が国家的な政策として実施されたことが文献史料からみることができます。

一方で、9世紀になると、移配された俘囚による反乱の記事が見られるようになります。上総国では、喜祥元(848)年2月に俘囚の丸子廻毛らの反乱、貞観十二(870)年には再び反乱が起こり、放火や略奪などが行われました。さらに、元慶七(883)年には、市原郡の俘囚30余人が反乱を起こし、郡の正倉から官物を盗み、人民を殺害したことが書かれています。下総国でも同様の反乱があったようです。このように、9世紀中頃から後半にかけて上総国を中心としてたびたび俘囚の反乱が起こっており、上総国と俘囚との関係は大きな問題だったようです。

ここでは、房総において俘囚の移住をはじめとする東北との関係が伺われる遺構や遺物を取り上げて紹介します。

長煙道カマドの住居

関東地方では、カマドが出現する古墳時代以降、煙道部が短いものが主流となっています。その中に、東北地方の古代集落で主体となる長煙道カマドを持つ竪穴住居跡を含む集落が確認されています。東関東(茨城・千葉)での長煙道カマドの出現は、古墳時代後期、6世紀代に若干みられます。茨城県では鹿嶋市厨台遺跡群と宮中野古墳群、千葉県では市原市草刈遺跡と我孫子市日秀西遺跡で各1軒確認されます。きわめて単発的ですが、この時期頃に東北との関係が存在していたことを伺わせます。

図44 短煙道カマドの住居跡
(印西市鳴神山遺跡)

図45 東北地方の長煙道カマドの住居跡
(宮城県郡山遺跡)

図46 市原市萩ノ原遺跡

図47 市原市坊作遺跡

奈良時代以降になると、特に、上総国の東京湾沿岸部に長煙道カマドをもつ竪穴住居跡が数多くみられるようになります。地域的にみると、市原市・袖ケ浦市・木更津市に集中しています。市原市坊作遺跡は、無住の地となっていた台地上に、南側に隣接する上総国分尼寺の建立を契機として8世紀中頃に出現した集落です。奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡119軒、掘立柱建物跡30棟の他、2基の鍛冶遺構などが調査されています。この遺跡は、集落出現時期である8世紀中葉に、鉄器生産の鍛冶遺構を伴う多くの竪穴住居が営まれる特徴があります。このことは、上総国分尼寺の造営に際して、この地に鉄器生産などの技術者を含む集団移住が行われたのを示しているのではないでしょうか。集落開始の8世紀中葉～8世紀後葉は約半数、8世紀末葉～9世紀中葉はほとんどの住居に東北地方由来の長煙道カマドが設けられ

図48 袖ケ浦市永吉台遺跡群
西寺原地区

ています。

同じような状況は、上総国府との関係が強い市原市稲荷台遺跡でもみられます。また、袖ケ浦市に近い萩ノ原遺跡は、寺院を含む８世紀後半～９世紀後半の集落で、調査された22軒の竪穴住居跡のほとんどが長煙道カマドを有しています。この遺跡では、鍛冶と思われる製鉄跡が５か所確認され、銑鉄塊や多量の砂鉄も出土しており、一連の工程が行われていた可能性も指摘されています。この遺跡に移配された俘囚集団の中に製鉄技術者が含まれていたのでしょう。

袖ケ浦市は、長煙道カマドのある竪穴住居跡を含む集落遺跡が多く確認されています。特に、市原市に近い永吉台遺跡群（遠寺原地区・西寺原地区）で顕著に見られます。この遺跡群は現在、東京ドイツ村となっています。遠寺原地区は、８世紀中頃～ 10世紀前半の集落で、竪穴住居跡51軒の内31軒で長煙道カマドが確認されています。また、８世紀末～９世紀末まで機能した寺院が存在しています。長煙道カマドは、集落開始の８世紀中頃から寺院機能が終息する９世紀末頃まではほぼすべての竪穴住居に付設されており、俘囚の集団移配によって遠寺原地区の集落が成立したと思われます。遠寺原地区の東側に隣接する西寺原地区では、９世紀後半頃～ 10世紀末までの竪穴住居跡133軒、土器焼成遺構60基などが調査されています。この地区の集落出現時期が遠寺原地区の寺院機能が終了する時期とほぼ同様であることから、遠寺原地区の俘囚集団によって新たな開発地として西寺原地区に進出していったようです。集落出現段階から多くの土器焼成遺構が営まれていることからは、土器生産技術を伴った俘囚集団の存在が想定されます。木更津市久野遺跡では、竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡４棟の他、寺院と思われる６基の基壇建物跡や鍛冶遺構などが調査されています。集落は８世紀後半～ 10世紀前半まで営まれ、長煙道カマドをもつ竪穴住居跡は、32軒中18軒と半数以上を占めています。製鉄遺構と寺の共存は市原市萩ノ原遺跡と共通する様相です。木更津市二重山遺跡でも長煙道カマドの住居とともに鍛冶遺構が見つかっています。

以上のように、東北由来の長煙道カマドをもつ竪穴住居跡を多く含む集落は、国府・国分尼寺や集落の寺院の造営に関わり、製鉄や土器生産などの生業にも深く関係したことが想定されます。強制的に移配された俘囚は、技術を有する労働力として位置づけられた可能性が考えられます。

蕨手刀

蕨手刀は、古墳時代の終わり頃から平安時代にかけて用いられた鉄製の刀で、柄の先端に山菜のわらびのような渦巻き状の突起がある形状から、「蕨手」刀と呼ばれています。全国で200点ほどが確認されていますが、東日本がほとんどで、特に岩手県・宮城県・北海道に集中しています。他には、長野県や群馬県にもある程度まとまった点数がみられます。蕨手刀の発祥は長野県あるいは群馬県とされていますが、そこから東北地方や北海道へ伝わり、在地化して定着したことから、「蝦夷の刀」とも呼ばれています。特に、柄の部分に透かしが入る「毛抜型蕨手刀」は、９世紀初め頃に東北地方で従来の蕨手刀を改良して製作されたものであり、関東以西ではほとんど出土しない「蝦夷」を出自とする蕨手刀です。蕨手刀の出土は、７世紀以降10世紀前半まで東北地方北部や北海道で営まれた「末期古墳」と呼ばれる墳墓からの出土が多く、埋葬された「蝦夷」の所有品、副葬品として用いられたようです。すなわち、蕨手刀、特に毛抜型蕨手刀は、蝦夷の存在を示す資料となっています。この毛抜型蕨手刀が、千葉

図50 蕨手刀束部分（根形台遺跡群）

図51 土坑墓内出土状況（根形台遺跡群）

図52 蕨手刀（市原市南大広遺跡）

図49 蕨手刀
（袖ケ浦市根形台遺跡群）

県の市原市と袖ケ浦市で確認されています。市原市南大広遺跡では、寺と思われる方形基壇が１基発見され、その基壇の中央の穴から、鎮壇具（ちんだんぐ）として埋納された蕨手刀が出土しました。明確な時期は不明ですが、９世紀代の遺構と考えられます。袖ケ浦市では、根形台（ねがただい）遺跡群のⅩⅣ地点２地区の土坑墓から出土しています。墓の副葬品であることは、東北地方での蕨手刀の埋納と同じ使われ方をしています。南大広遺跡の蕨手刀と類似した形状をしていることから、時期的にも同じ９世紀代と考えられます。

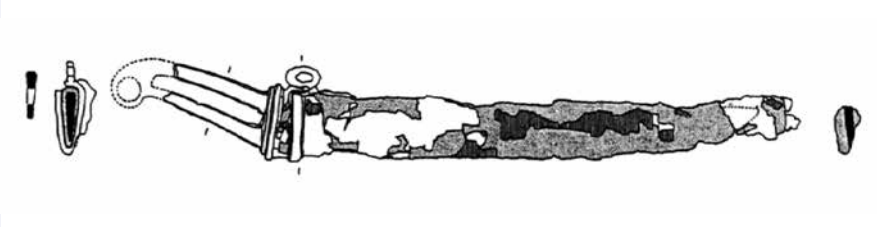


図53 毛抜型蕨手刀（宮城県多賀城跡）

東北地方を出自とする毛抜型蕨手刀が、多くの長煙道カマドをもつ竪穴住居で構成される集落が集中する市原市と袖ケ浦市で出土していることは、この地域に俘囚として移配された集団の性格を表しているように思われます。全国的な俘囚が想定される遺跡の中でも、この地域は圧倒的に長煙道カマドを採用する比率が高く、移配先の社会に適応するというよりも、ある程度高い意識で俘囚集団のまとまりを大切にしていた様子を見て取ることができます。蕨手刀は、その象徴として扱われたのではないでしょうか。上総国では、たびたび俘囚の反乱が起きていることも、集団のまとまりや意識の高さを示しているようです。

東北からもたらされた土器

東北地方から移住させられた俘囚が定住していた痕跡は、長煙道カマドによって伺うことができますが、故地の生活で使用していた道具類を移配先の遺跡で見ることはほとんどありません。このことは、移配される際には、地元で使っていた土器などの生活道具類を携えることはなかったものと思われます。おそらく、移配先で生産された道具類を日常生活で使っていたのではないでしょうか。

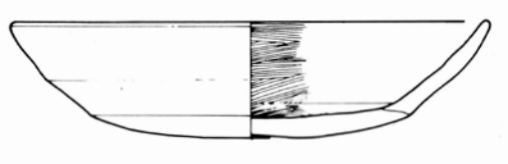


図54 東北系土器
（市川市総合運動場内遺跡）

千葉県では、市川市市営総合運動場内遺跡と栄町向台遺跡で各１点のみですが、東北で生産された可能性の高い土器が見つかっています。いずれも古代の役所跡からの出土であり、何らかの交流を伺わせる資料です。

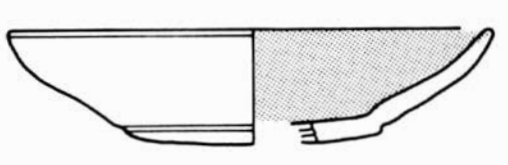


図55 東北系土器
（栄町向台遺跡）

出土文字資料からみた東北との関係

千葉県と東北地方との関係を示す墨書土器などの文字資料が遺跡から発掘されています。千葉県では、八日市場市（現匝瑳市）平木遺跡の調査で注目される墨書土器が出土しました。太平洋岸の九十九里低地に位置し、竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡７棟の他、道路状遺構などが検出されました。この遺跡からは、「郡厨」や「廳（庁）」などの役所的な性格を意味する墨書土器が見つかっており、一般の集落とは異なる機能を有していた遺跡と考えられます。

図56「遠田勲」墨書土器（匝瑳市平木遺跡）

この遺跡では、「遠田勲（とうだくん）」と書かれた墨書土器が注目されます。「遠田」については、古代陸奥国の北部、北上川下流域に想定される「遠田郡」を示しているものと考えられます。遠田郡の初見は、『続日本紀』天平九（737）年四月条に、「仍（よ）りて田夷（でんい）遠田郡領外従七位上遠田君雄人を差して、海道に遣（つかわ）す」という記載です。平木遺跡から出土した「遠田勲」の墨書土器は、８世紀中葉前後と想定され、遠田郡初見記事とほぼ同様の時期となります。この「遠田」が「遠田郡」となれば、九十九里の地域と陸奥国北部地域との間で、海上交通による関係が存在していた可能性があります。遠田郡の海側の牡鹿郡には、牡鹿柵に比定される関東系土師器を主体とする赤井遺跡やその墓域とな

る矢本横穴群が存在していることからも、その関係性が注目されます。

一方、東北地方でも千葉県と関連する文字資料が見つかっています。陸奥国最北端の志波城跡と想定される太田方八丁遺跡から、９世紀前半代の「上総□」と読める墨書土器が出土しています。この志波城跡は、北上川の上流域に位置しており、九十九里と関係する可能性のある牡鹿地方と川でつながっています。また、日本海側の丘陵上に位置する秋田城跡では、８世紀末に廃棄された多くの木簡の中に「上総国部領解　申宿直／合五人　火」と判読できる木簡が出土しています。これは、秋田城の東門などの警備にあたるために宿直する者について報告した解文で、上総国から送られた兵を率いる部領使が部下の五人の名前を報告した内容です。８世紀末頃に、上総国の兵が出羽国の秋田城に送られたことを示しています。

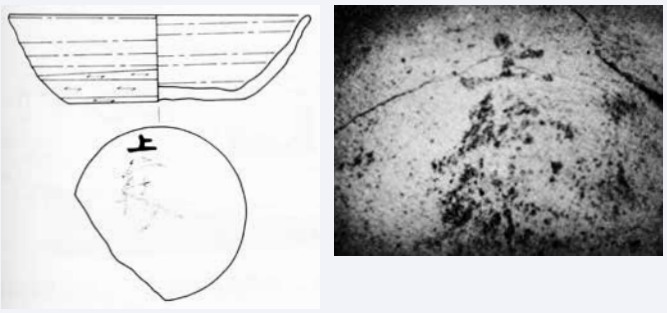


図57「上総□」墨書土器
（岩手県太田方八丁遺跡、志波城跡）

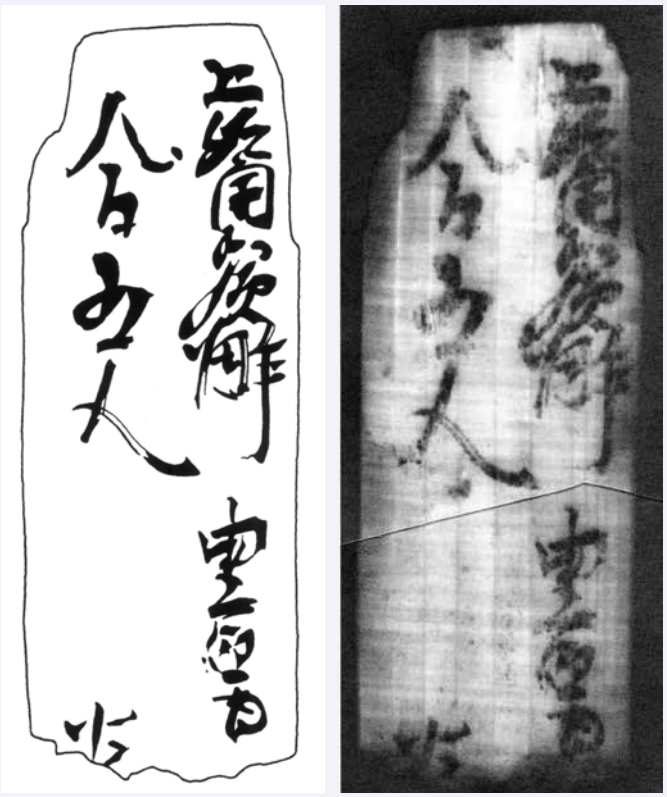


図58「上総国・・・・・」木簡
（秋田県秋田城跡）

また、宮城県矢本町（現東松島市）赤井遺跡出土の須恵器甕の頸部に刻書された「春□」が注目されます。古墳時代の高壇式横穴の項で触れたように、赤井遺跡が所在する古代陸奥国牡鹿郡に住む「春日部奥麻呂」が武射臣という姓を賜ったことから、春日部奥麻呂は上総国武射郡の出身であった可能性がきわめて高いことが想定されています。このことから、赤井遺跡の「春□」は移民系氏族である春日部氏とつながりがあるのではないかという指摘もあります。春日部については、『日本書紀』安閑天皇元年四月条の「伊甚屯倉」設置記事との関連で考えられています。記事は、上京するのが遅く、朝廷から求められた真珠を期限までに納めることができなかったことで朝廷の怒りを買い、それを恐れた伊甚国造である伊甚直稚子らが春日皇后の寝殿に逃げ込んだために罪に問われ、贖罪のために伊甚屯倉を献上したという内容です。屯倉の設置は古墳時代後期の出来事で、伊甚屯倉は現在の夷隅郡付近に想定されています。後世の記事ですが、『日本三代実録』貞観九（867）年四月二〇日条に「上総国夷灘郡人春部直黒主売」とあり、夷灘郡に「春部」という氏族が存在していたようです。このことから、安閑天皇の時代に春日皇后の名代（大化前代の皇室の私有民）として春日部がおかれたことが考えられています。袖ケ浦市上大城遺跡から出土した９世紀前半の甕の胴部外面に書かれた人面墨書土器に「春部」の文字が確認されます。人面は欠損部分が大きく判然としませんが、文字は五行にわたって書かれています。文字は墨痕が薄く、「司／□□家／海□狭井／郷春部直／臣主女」が判読できますが、さらに文字があった可能性もあります。「春部直臣主女」は人名であり、遺跡が所在する古代上総国海上郡にも春部（春日部）が分布していたことが考えられます。伊甚屯倉を拠点とした春日部が、奈良・平安時代に東北地方への移住を行うとともに、上総国で広く勢力を伸ばしていたことが想定されます。

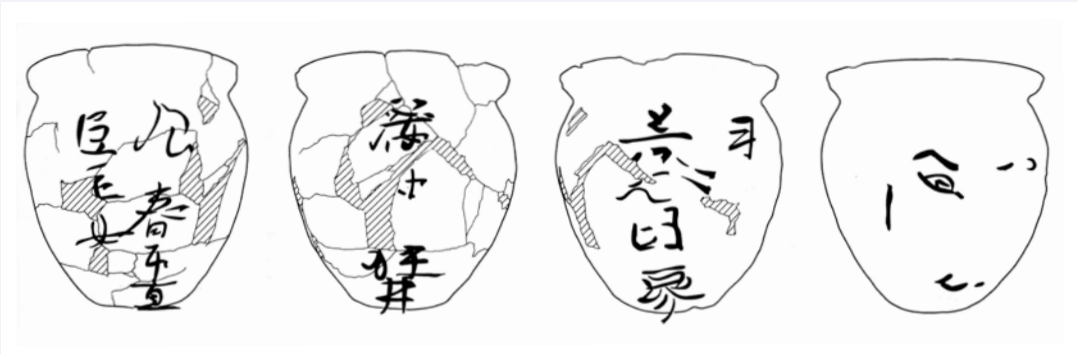


図59 人面墨書土器（袖ケ浦市上大城遺跡）

展示資料一覧

	番号	資料名	遺跡名	県市町村	所蔵者
第Ⅰ部	1	荒屋型彫刻刀形石器	南大和田遺跡	野田市	野田市教育委員会
	2	荒屋型彫刻刀形石器	聖人塚遺跡	柏市	千葉県教育委員会
	3～5	細石刃	一本桜遺跡	白井市	千葉県立房総のむら
	6	角二山型掻器	一本桜遺跡		
	7	荒屋型彫刻刀形石器	松崎Ⅵ遺跡	印西市	千葉県教育委員会
	8	荒屋型彫刻刀形石器	一鍬田甚兵衛山遺跡	多古町	
	9～18	細石刃	駒井野荒追遺跡	成田市	成田市教育委員会
	19	角二山型掻器	天神峰遺跡		成田山霊光館
	20	角二山型掻器	台方外平Ⅱ遺跡		成田市教育委員会
	21	削片	キサキ遺跡４地点		
	22・23	荒屋型彫刻刀形石器	キサキ遺跡４地点		
	24	削片	東峰御幸畑西（No.61）遺跡		千葉県教育委員会 個人蔵
	25～27	細石刃核			
	28～36	細石刃			
	37～46	荒屋型彫刻刀形石器	東峰御幸畑西（No.61）遺跡		
	47～49	角二山型掻器			
	50	掻器			
	51	削器			
	52	礫器			
	53	母型			
	54～56	剥片			
	57・58	打面再生剥片			
	59	細石刃核	大栄十余三新堀遺跡		
	60	剥片	高岡大福寺遺跡	佐倉市	佐倉市教育委員会
	61	細石刃核			
	62・63	掻器	高岡大山遺跡		
	64	削器			
	65・66	細石刃核	木戸場遺跡Ａ地点		
	67～69	細石刃			
	70～78	荒屋型彫刻刀形石器			
	79	掻器			
	80～83	角二山型掻器			
	84・85	掻器			
	86～92	削器			
	93	敲石			
	94	削片	枡形遺跡 （大網山田台遺跡群No.8）	大網白里市	大網白里市教育委員会
	95	細石刃核			
	96～104	細石刃			
	105～110	荒屋型彫刻刀形石器			
	111～113	角二山型掻器			
	114・115	削器			
	116	荒屋型彫刻刀型石器	草刈六之台遺跡	市原市	千葉県教育委員会
	117	細石刃核	東上泉遺跡	袖ケ浦市	
	118	母型	向郷菩提遺跡	君津市	
	119・120	細石刃核	向郷菩提遺跡	君津市	
	121	削片	六通神社南遺跡	千葉市	
	122・123	削器	六通神社南遺跡		
	124	細石刃	中鹿子第２遺跡		
	125	荒屋型彫刻刀形石器	中鹿子第２遺跡		
	126	細石刃	上宿遺跡	芝山町	芝山町教育委員会
	127	細石刃	雷下遺跡	市川市	千葉県教育振興財団（保管）
	128・129	細石刃核	木戸先遺跡	四街道市	四街道市教育委員会
	130・131	荒屋型彫刻刀形石器			
	132	細石刃			
	133	細石刃核	墨古沢遺跡	酒々井町	千葉県教育委員会
	134・135	荒屋型彫刻刀型石器	和良比遺跡本山地点	四街道市	四街道市教育委員会
	136	削片	加茂台遺跡	多古町	千葉県教育振興財団（保管）
	137・138	打面再生剥片	一ツ塚遺跡	多古町	千葉県教育振興財団（保管）
	139・140	掻器	一ツ塚遺跡	多古町	千葉県教育振興財団（保管）
	141～143	細石刃核	一ツ塚遺跡	多古町	千葉県教育振興財団（保管）

	番号	資料名	遺跡名	県市町村	所蔵者
第Ⅰ部	144～158	細石刃	一ツ塚遺跡	多古町	千葉県教育振興財団(保管)
	159	砥石	一ツ塚遺跡	多古町	千葉県教育振興財団(保管)
	160	ナイフ形石器	鹿島前遺跡	我孫子市	我孫子市教育委員会
	161	ナイフ形石器	大松遺跡	柏市	千葉県教育委員会
	162	接合資料 (二次加工のある剥片他)	富士見遺跡		
	163	ナイフ形石器	小山台遺跡Ｂ区		
	164	ナイフ形石器	原畑遺跡		
	165	ナイフ形石器	白井第一遺跡	白井市	千葉県立房総のむら
	166	ナイフ形石器	一本桜南遺跡		白井市教育委員会
	167	ナイフ形石器	油作第2遺跡(平賀遺跡群)	印西市	印西市教育委員会
	168	接合資料(剥片)	彦八山遺跡	松戸市	松戸市教育委員会
	169	ナイフ形石器	鷲谷津遺跡	千葉市	千葉県教育委員会
	170	ナイフ形石器	源七山遺跡	船橋市	千葉県教育委員会
	171	ナイフ形石器	城の腰遺跡	千葉市	千葉県立房総のむら
	172	ナイフ形石器	椎名崎古墳群Ｂ支群		千葉県教育委員会
	173	ナイフ形石器	鶴牧遺跡	市原市	千葉県教育委員会
	174	ナイフ形石器	西長山野遺跡	横芝光町	千葉県立房総のむら
	175・176	剥片			
第Ⅱ部	177・178	銛頭	加曽利貝塚	千葉市	千葉市教育委員会
	179	釣針			
	180	銛頭	馬場遺跡第５地点	印西市	印西市教育委員会
	181	釣針	矢作貝塚	千葉市	千葉市教育委員会
	182	銛頭	鉈切洞穴	館山市	千葉県教育委員会
	183・184	結合式鈎			
	185～189	釣針			
	190～193	銛頭	大寺山洞穴	館山市	千葉大学
	194	銛頭	山野貝塚	袖ケ浦市	袖ケ浦市郷土博物館
	195	銛頭	永井作貝塚	木更津市	木更津市教育委員会
	196	銛頭	一宮(貝殻塚)貝塚	一宮町	睦沢町立歴史民俗資料館
	197	銛頭	石神貝塚	茂原市	
	198～200	銛頭	余山貝塚	銚子市	銚子市教育委員会
	201	釣針			千葉県立房総のむら
	202	銛頭	向油田貝塚	香取市	早稲田大学
	203	銛頭	大寺山洞穴	館山市	千葉大学
	204	銛頭	荒海貝塚	成田市	早稲田大学
	205～211	銛頭	称名寺Ｄ貝塚第３地点	神奈川県 横浜市	横浜市ふるさと歴史財団
	212～214	結合式鈎			
	215～232	銛頭	南境貝塚	宮城県 石巻市	宮城県教育委員会
	233～246	釣針			
	247	銛頭	相子島貝塚	福島県 いわき市	いわき市教育委員会
	248～250	銛頭	大畑貝塚		
	251～257	釣針			
	258	斧状鹿角製品			
	259～264	銛頭	薄磯貝塚		
	265～270	釣針			
	271～274	縄文土器	山口雷土遺跡	成田市	千葉県立房総のむら
	275・276	縄文土器	道免き谷津遺跡第３地点	市川市	千葉県教育委員会
第Ⅲ部	277～279	荒海１式壺	御山遺跡	四街道市	千葉県教育委員会
	280～286	東海系条痕文土器			
	287	再葬墓壺	南屋敷遺跡(源町遺跡群)	千葉市	千葉市教育委員会
	288～291	再葬墓壺	塙台遺跡(志摩城跡)	多古町	多古町教育委員会
	292	東海産壺	長倉宮ノ前遺跡	横芝光町	横芝光町教育委員会
	293	浅鉢			
	294	小型壺			
	295～297	東海産壺片			
	298・299	搬入土器片			
	300・301	壺片(同一個体)			
	302～307	在地産条痕文土器片			
	308・309	甕			
	310～312	壺			

	番号	資料名	遺跡名	県市町村	所蔵者
第Ⅲ部	313・314	再葬墓壺	塙台遺跡（志摩城跡）	多古町	多古町教育委員会
	315・316	再葬墓壺	武士遺跡	市原市	千葉県教育委員会
	317	再葬墓小型鉢			
	318～320	再葬墓壺	船子遺跡	大多喜町	千葉県教育委員会
第Ⅳ部	321～323	土師器杯（栗囲式土器）	郡山遺跡	宮城県 仙台市	仙台市教育委員会
	324～327	土師器杯（鬼高式土器）	厨台遺跡	茨城県 鹿嶋市	鹿嶋市文化スポーツ 振興事業団
	328・329	土師器杯（鬼高式土器）	向台遺跡	栄町	千葉県教育委員会
	330～334	土師器杯（鬼高式土器）	日秀西遺跡	我孫子市	千葉県立房総のむら
	335・336	土師器杯（鬼高系土器）	西台畑遺跡	宮城県 仙台市	仙台市教育委員会
	337	土師器高杯	西台畑遺跡		
	338～343	土師器杯（鬼高系土器）	郡山遺跡		
	344	土師器杯（栗囲式土器）	郡山遺跡		
	345	２円窓鍔付き直刀	胡摩手代16号墳	山武市	山武市教育委員会
	346	２円窓鍔付き直刀	清水遺跡S12号墳	四街道市	千葉県教育委員会
	347	２方窓鍔	六通金山遺跡１号墳	千葉市	
	348	２円窓鍔	小申田横穴群北18号横穴	福島県 いわき市	いわき市教育委員会
	349	あごひげの埴輪	椎名崎古墳群Ｂ支群 （人形塚古墳）	千葉市	千葉県教育委員会
	350	あごひげ片			
	351	あごひげの埴輪	大方鹿島神社古墳	茨城県 常陸太田市	大方鹿島神社（個人蔵）
	352	あごひげの埴輪	牛転１号墳	福島県 いわき市	いわき市教育委員会
	353	須恵器瓿	山崎横穴群13号横穴	茂原市	千葉県立房総のむら
	354	須恵器甕	山崎横穴群30号横穴		
	355	須恵器長頸瓶	西国吉横穴群７号横穴	市原市	市原市教育委員会
	356	土師器高杯	西国吉横穴群10号墓		
	357・358	須恵器平瓶	鷲ノ山横穴墓群Ａ群	匝瑳市	匝瑳市教育委員会
	359・360	須恵器長頸瓶			
	361	須恵器フラスコ形長頸瓶			
第Ⅴ部	362・363	土師器杯	宮中野古墳群	茨城県 鹿嶋市	鹿嶋市文化スポーツ 振興事業団
	364	土師器甕			
	365・366	土師器鉢	草刈遺跡Ｂ区	市原市	千葉県教育委員会
	367・368	土師器杯	日秀西遺跡	我孫子市	千葉県立房総のむら
	369	土師器甕			
	370～373	土師器甕	萩ノ原遺跡	市原市	市原市教育委員会
	374・375	土師器杯（墨書土器）			
	376～378	土師器杯	坊作遺跡		
	379～381	土師器杯	稲荷台遺跡		
	382	土師器皿 （「貞観」紀年銘墨書土器）複製			
	383	須恵器杯	二重山遺跡	木更津市	千葉県教育委員会
	384・385	羽口			
	386	土師器杯	西寺原地区（永吉台遺跡群）	袖ケ浦市	袖ケ浦市郷土博物館
	387・388	土師器甕			
	389	土師器杯			
	390	須恵器小壺			
	391～395	土師器杯	遠寺原地区（永吉台遺跡群）		
	396	須恵器杯			
	397	瓦塔			
	398・399	土師器杯	権現後遺跡	八千代市	八千代市教育委員会
	400	蕨手刀	南大広遺跡	市原市	市原市教育委員会
	401	蕨手刀	根形台遺跡群ⅩⅣ地点	袖ケ浦市	袖ケ浦市郷土博物館
	402	東北系土師器杯	総合運動場内遺跡	市川市	市川市教育委員会
	403	東北系土師器杯	向台遺跡	栄町	千葉県教育委員会
	404	土師器皿（「遠田勲」墨書土器）	平木遺跡	匝瑳市	千葉県立房総のむら
	405・406	土師器杯（墨書土器）			
	407	土師器甕（人面墨書土器）	上大城遺跡	袖ケ浦市	袖ケ浦市郷土博物館
	408	土師器台付き甕			

図・写真出典・提供

第Ⅰ部

図1 ～3・5・6 橋本作成
図4 旧石器文化談話会 2007『旧石器考古学辞典＜三訂版＞』図69

第Ⅱ部

図7・10 樋泉岳二 2014「漁撈の対象」『講座日本の考古学4 縄文時代(下)』図3
図8 樋泉岳二 2014「漁撈の対象」『講座日本の考古学4 縄文時代(下)』表1
図9 宮城県教育委員会 2016『田柄貝塚Ⅲ 骨角牙貝製品・自然遺物』第33図141
図12 高橋　健 2016「称名寺貝塚の骨角製漁具」『称名寺貝塚と称名寺遺跡』第2図
図9・11・13 ～16、10の写真 服部作成・撮影

第Ⅲ部

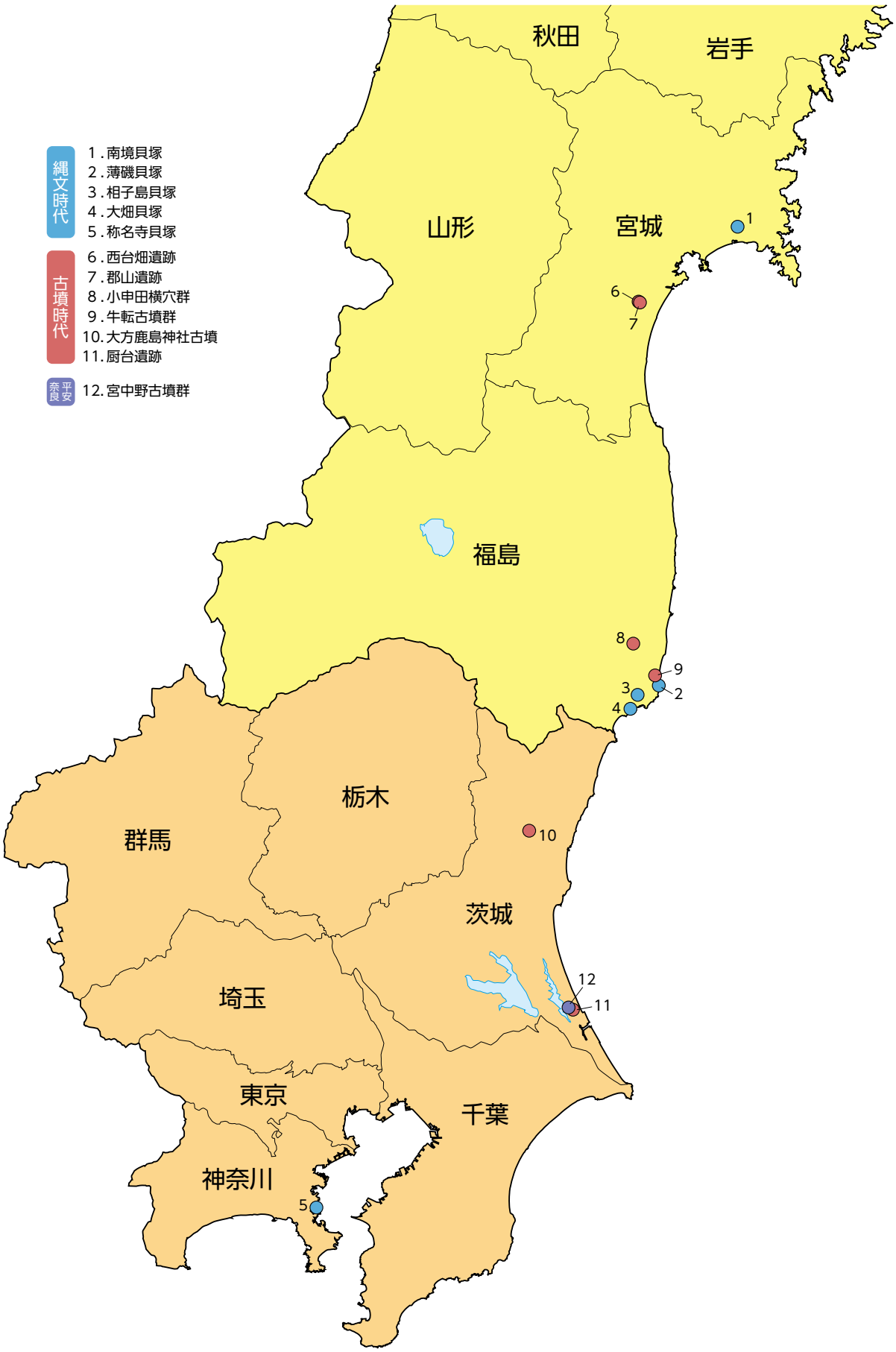
図17 豊川市教育委員会 1993『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』図版54
図18 霊山根古屋遺跡調査団 1986『霊山根古屋遺跡の研究』挿図9
図20の遺構図 財団法人千葉市文化財調査協会 2001『千葉市源町　高津辺田遺跡・南屋敷遺跡』第32図
図21・22・24 財団法人香取郡市文化財センター 2006『志摩城跡・二ノ台遺跡Ⅰ』図版167・248
図23 財団法人山武郡市文化財センター 2007『長倉宮ノ前遺跡-国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書Ⅳ』巻首図版２
図25 群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会 1988『第9回三県シンポジウム　東日本の弥生墓制』
図26・27 財団法人千葉県文化財センター 1996『市原市武士遺跡１　福増浄水場建設埋蔵文化財調査報告書』
図19・20 の写真・28・29　栗田撮影

第Ⅳ部

図30 栗田撮影
図31 財団法人鹿嶋町文化スポーツ振興事業団 1993『鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告Ⅹ』Fig101
図32 仙台市教育委員会 2016『郡山遺跡第243次調査　西台畑遺跡第11次調査-仙台市あすと長町17街区・商業施設建設に伴う発掘調査報告書-』第195図
図33 仙台市教育委員会 2013『郡山遺跡第167・180・196次調査-仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ』第48図
図34・36 栗田作成
図37 ～39・42 栗田撮影
図40 財団法人千葉県文化財センター 1982『茂原市山崎横穴群』第71図、写真は当財団
図41 鷲ノ山横穴墓群調査会 1991『千葉県八日市場市鷲ノ山横穴墓Ａ群発掘調査報告書』図版十六、写真は匝瑳市教育委員会提供
図43 宮城県東松島市教育委員会 2010『矢本横穴墓群Ⅱ-飛鳥・奈良時代における牡鹿地方の墓-地域防災総合治山工事に伴う調査報告書』第114図、写真は東松島市教育委員会提供

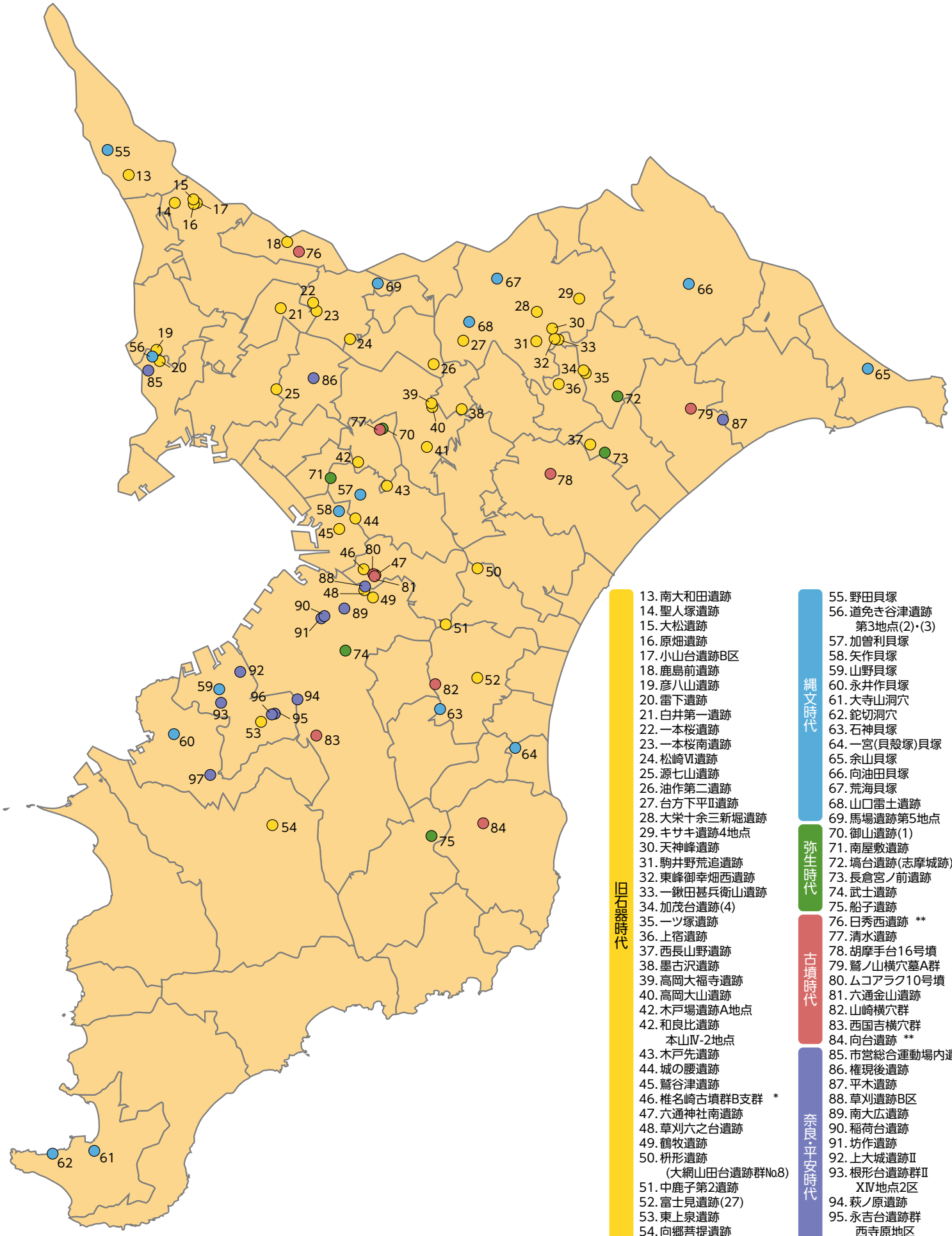
第Ⅴ部

図44 当財団
図45 仙台市教育委員会 2016『郡山遺跡第243次調査　西台畑遺跡第11次調査-仙台市あすと長町17街区・商業施設建設に伴う発掘調査報告書-』写真図版7
図46・47・52市原市教育委員会提供
図48 袖ケ浦市教育委員会提供
図49 ～51 袖ケ浦市教育委員会 2002『千葉県袖ヶ浦市根形台遺跡群Ⅱ 畑地帯総合整備事業(緊急整備型)根形台地区埋蔵文化財発掘調査報告書第２冊』巻頭図版・第211図
図53 宮城県多賀城跡調査研究所 1972『宮城県多賀城跡調査研究所年報1971』(第12 ～14次調査)26図－1
図54 市川市教育委員会 1981「1．市営総合運動場内遺跡」『昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告』第4図
図55 財団法人千葉県教文化財センター 1985『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書第258図
図56 栗田撮影
図57 岩手県教育委員会 1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-ⅩⅢ-太田方八丁遺跡(志波城跡)』第18-2図・第127図
図58 秋田市教育委員会 2002『秋田城跡-政庁跡-』図17・図版10
図59 財団法人君津郡市文化財センター 2005『千葉県袖ケ浦市袖ケ浦椎の森工業団地内埋蔵文化財調査報告書(第Ⅱ分冊)上大城遺跡Ⅱ』第244図



展示遺跡位置図

※千葉県は裏表紙



旧石器時代

13. 南大和田遺跡
14. 聖人塚遺跡
15. 大松遺跡
16. 原畑遺跡
17. 小山台遺跡B区
18. 鹿島前遺跡
19. 彦八山遺跡
20. 雷下遺跡
21. 白井第一遺跡
22. 一本桜遺跡
23. 一本桜南遺跡
24. 松崎Ⅵ遺跡
25. 源七山遺跡
26. 油作第二遺跡
27. 台方下平Ⅱ遺跡
28. 大栄十余三新堀遺跡
29. キサキ遺跡4地点
30. 天神峰遺跡
31. 駒井野荒追遺跡
32. 東峰御幸畑西遺跡
33. 一鍬田甚兵衛山遺跡
34. 加茂台遺跡(4)
35. 一ツ塚遺跡
36. 上宿遺跡
37. 西長山野遺跡
38. 墨古沢遺跡
39. 高岡大福寺遺跡
40. 高岡大山遺跡
42. 木戸場遺跡A地点
42. 和良比遺跡
本山Ⅳ-2地点
43. 木戸先遺跡
44. 城の腰遺跡
45. 鷲谷津遺跡
46. 椎名崎古墳群B支群 *
47. 六通神社南遺跡
48. 草刈六之台遺跡
49. 鶴牧遺跡
50. 枡形遺跡
(大網山田台遺跡群No.8)
51. 中鹿子第2遺跡
52. 富士見遺跡(27)
53. 東上泉遺跡
54. 向郷菩提遺跡

縄文時代

55. 野田貝塚
56. 道免き谷津遺跡
第3地点(2)・(3)
57. 加曽利貝塚
58. 矢作貝塚
59. 山野貝塚
60. 永井作貝塚
61. 大寺山洞穴
62. 鉈切洞穴
63. 石神貝塚
64. 一宮(貝殻塚)貝塚
65. 余山貝塚
66. 向油田貝塚
67. 荒海貝塚
68. 山口雷土遺跡
69. 馬場遺跡第5地点

弥生時代

70. 御山遺跡(1)
71. 南屋敷遺跡
72. 塙台遺跡(志摩城跡)
73. 長倉宮ノ前遺跡
74. 武士遺跡
75. 船子遺跡

古墳時代

76. 日秀西遺跡 **
77. 清水遺跡
78. 胡摩手台16号墳
79. 鷲ノ山横穴墓A群
80. ムコアラク10号墳
81. 六通金山遺跡
82. 山崎横穴群
83. 西国吉横穴群
84. 向台遺跡 **

奈良・平安時代

85. 市営総合運動場内遺跡
86. 権現後遺跡
87. 平木遺跡
88. 草刈遺跡B区
89. 南大広遺跡
90. 稲荷台遺跡
91. 坊作遺跡
92. 上大城遺跡Ⅱ
93. 根形台遺跡群Ⅱ
XⅣ地点2区
94. 萩ノ原遺跡
95. 永吉台遺跡群
西寺原地区
96. 遠寺原遺跡
97. 二重山遺跡

* 古墳時代を含む
** 奈良・平安時代を含む

展示遺跡位置図(千葉県)

●発　行　日：令和２年７月18日
●編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団　〒284-0003　四街道市鹿渡809-2
●印　　刷：株式会社エリート情報社